

# 社会科研究のてびき

社会を見つめ，未来を問いつける社会科教育の創造

—学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力の育成—



平成27年3月

広島市小学校教育研究会社会科部会

\* \* \* \* \* 目 次 \* \* \* \* \*

まえがき

I	広島社会科のめざすもの	1
---	-------------	---

II 主題設定の理由

1	主題設定の理由	4
2	研究主題について	6
3	研究主題に向けて育てたい力	8

III 研究の視点

1	教材	12
2	学習過程	20
3	学習活動	28
4	学習評価	33

IV 研究の進め方

1	授業づくりの方法	38
2	指導案の作成	41
3	研究協議会のもち方	45

〔 付 記 〕

1	「生活科」との関連	46
2	「総合的な学習の時間」との関連	52
3	「言語・数理運用科」との関連	54
4	「平和教育」との関連	57
5	児童の実態調査	62

あとがき

# I 広島社会科のめざすもの

## 1 広島社会科の研究の歩み

広島社会科は、創設以来一貫して、「学ぶことが楽しい」、「意欲的に学ぶ」、「活動や体験を楽しむ」、「豊かな表現をする」、「ふりかえり、工夫する」、「関わりを大切にする」というような子どもたちの育成をめざしてきた。「学ぶ喜びがあり、考え、地域の事象や人物から学ぶ社会科」の実践研究を積み重ね、その成果を絶えず全国に発信し続けてきた。

平成4年の全国大会では、『人間の生き方にせまり、自ら学ぶ力を高める社会科学習ー具体的な活動や体験を通してー』という研究主題を掲げた。具体的な活動を通して、思考、判断、表現できる能力の育成を図るといった新しい学力観に立つ社会科教育のあり方を提案した。

また、3度目の開催となった平成17年の全国大会では、『豊かに感じ 深く考え ともに高まり合う社会科学習ーよりよい社会をつくるために、考え、判断する子どもをめざしてー』を研究主題に掲げた。問題解決のための思考力・判断力を育むために、出会いと発見、感動のある学習材を開発すること、そして子どもたち自らが問いを見つけ、調べて考え、表現し、仲間とともに考えを深めていく社会科学習を提案した。その提案は参加者の多くの賛同を頂くことができた。

平成17年以降も、これまでの研究主題を引き継ぎ、「自らの意思で社会をつくっていく」という意欲と「その社会を維持し、発展させていく資質や能力」を身につけた子どもたちを育成するために、人間の思いに共感する心情を豊かにする授業、多面的に考えたり判断したりする授業、社会的事象と関わり、その意味や背景を追究していく中でともに高まり合う授業をめざし研究実践を行ってきた。

## 2 「広島社会科」が育む力

社会の変化と共に、それぞれの時代が要求する学力観も変化していく。広島社会科も、先述のように時代とともに研究主題を変え、これまで多くの実践研究を積み重ねてきた。しかし、変わらず大切にしてきたことがある。広島は国際平和文化都市であり、広島に生まれ育った子どもたちが10年後、20年後に大人になったとき、平和で豊かな社会を実現するために、必要な力を育成することである。本研究会顧問 広島大学大学院教育学研究科教授 小原友行先生は、この力を「国際平和文化創造力」とした。それは「学習指導要領が求める4観点別目標を基にして、平和な国際社会を形成していくための5番目の観点となる力であり、平和な国際社会を構築し、人のために尽くしていくために必要な『平和な国際社会の実現をめざして世界の人々と交流していくための力』、『共通の目的に向かって異なる他者と関わりながら、新しい平和文化を創造していく力』、『人と人との関わりを生み出していく力』の三つの力が含まれる」と述べている。これらの力は、どのような時代に生きようとも、どこの国に住もうとも、人間として普

遍的に大切な資質や能力である。

では、なぜこのような力が「広島社会科」に求められるのだろうか。その背景には、大きく二つの理由が考えられる。

第一に、広島に住む人々の願いとの関わりである。広島は、被爆という壊滅的な被害を受けながら、人々の尽力によって国際平和文化都市として見事に復興を果たし、これまで世界に平和を訴えてきた歴史的な土壌がある。広島の子どもたちには、「ヒロシマを受け継ぎ、地球的視野で考え、相互の基本的な人権を尊重し、よりよい人間社会の創造のために貢献し、国際社会に通用する社会人になるとともに、地域で平和のために汗を流せる人になってほしい」という戦後変わらぬ願いがあるからである。

第二に、子どもたちがこれからの時代を生きていくために必要な力との関わりである。子どもたちが社会に出る10年後、20年後、グローバル化や高度情報化など社会が急速に変化することによる問題や課題、また環境破壊や飢餓などの地球規模的な問題などがさらに深刻さを増すと考えられる。こうした中で、共通の目的に向かって異なる他者と関わりながら、知恵を出し合い、平和でよりよい社会を創造していく力の育成が求められているからである。

また、これらの力は、広島県が行った調査や国際学力調査などの結果から広島の子どもたちが不足している力と指摘されてもいる。

### 3 「広島社会科」が育てる子どもの姿

このような力を身に付けた子どもの姿として、平和記念式典における「平和への誓い」を紹介したい。

平成19年8月6日、小学校6年生の代表の児童は、原爆の悲惨さを訴えた後、「しかし、原爆によって失われなかったものがあります。それは、生きる希望です。」と述べた。また、「平和な世界をつくるためには、『憎しみ』や『悲しみ』の連鎖を、自分のところで断ち切る強さと優しさがが必要です。」そして、文化や歴史の違いを超えて、お互いを認め合い、相手の気持ちを考えを知ることが大切です。」と続けている。そして、最後に「私たちは、あの日苦しんでいた人たちを助けることはできませんが、未来の人たちを助けることはできるのです。私たちは、ヒロシマを『遠い昔の話』にはしません。」と結んでいる。

また、平成23年には、東日本大震災の被害と原爆の悲惨さを重ね合わせた後、「わたしたち一人一人は、だれもがみな大切な存在です。」、「戦争を始めるのは人間です。人間の力で起こさないようにできるはずです。」と力強く述べた。また、「未来をつくるのは人間です。喜びや悲しみを分かち合い、あきらめないで進めば、必ず夢や希望が生まれます。」と続けている。そして、最後に「わたしたちは、人間の力を信じています。人間は、相手を思いやり、支え合うことができます。人間は、お互いを理解し合い、平和の大切さを伝え合うことができます。わたしたちは、今を生きる人間として、夢と希望があふれる未来をつくるために、行動していくことを誓います。」と結んでいる。

「平和への誓い」には、戦争や原爆、災害等の事実を知るだけでなく、その背景を熟

考し、自分なりの考えをもち、それを表現しながら社会への参加・参画を考えようとすることの重要性を世界に伝えており、また、そのような生き方を貫いていくという決意を示している。この力は、人間として普遍的に大切なものであり、これこそが「広島社会科」で育てたい子ども像である。

このような広島の子どもたちを育てていくために、私たち「広島社会科」を志す教師は、まず「広島・ヒロシマ・広島」のアイデンティティーを貫く必要があるのではないだろうか。そして地域の特徴を生かし、地域とつながり、人々の営みに学ぶことを通して、未来に希望を見出すことができる社会科教育を創造していく必要があるのではないだろうか。

今回の研究主題の設定は、これまで広島の教師たちが築き上げてきた「広島社会科」を継承しつつ、社会認識の形成と公民的資質の育成とはどういうことで、それはどうすれば実現できるのかを探る実践研究を進めるために提起するものである。

#### <引用・参考文献>

- 広島市小学校教育研究会社会科部会『広島社会科 第37集論説』，平成20年
- 広島市教育委員会『広島らしい新しい教育推進のために』，平成12年
- 広島市教育委員会『平和への誓い』，平成19年，平成23年

## II 主題設定の理由

### 研究主題

社会を見つめ、未来を問いつける社会科教育の創造  
－学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力の育成－

### 1 主題設定の理由

#### (1) 教育基本法の改定と社会科の果たす役割

平成18年12月、約60年ぶりに教育基本法が改正され、これからの教育のあるべき姿、めざすべき理念が明らかにされた。また、それを受けて平成19年には学校教育法をはじめ教育三法も改正され、教育改革は新たな一步を踏み出した。昭和22年に教育基本法が制定されてから、教育を取り巻く環境が大きく変わったからである。

科学技術の進歩、情報化・国際化、少子高齢化、核家族化、価値観の多様化などに代表される社会の大きな変化、教育力の低下や育児に不安を抱える親の増加などの家庭の問題、家庭と同じく教育力の低下や連帯感の希薄化などの地域社会の問題、学校もいじめや校内暴力などの問題行動や教育の質の向上といった課題を抱えている。

そして何よりも、日々教育実践に取り組んでいるわたしたち教員が感じている子どもたちの大きな変化がある。基本的生活習慣の乱れ、学ぶ意欲の低下や学力の低下傾向、体力の低下、社会性・規範意識の欠如などである。

こうした子どもたちの実態から出発し、家庭・学校・地域社会を含めた変化の激しい社会全体の中で、常に出てくる新しい課題に試行錯誤しながらも柔軟に対応していく力を子どもたちに育成していくことが必要である。同時に、このような社会を主体的に生きていくためには、よりよい社会の実現をめざして現代社会の課題を発見し解決していくことのできる力を備えていることが求められている。すなわち、社会的事象を知る・分かるだけでなく、その背景を熟考し、それに対する自分なりの意見や考えをもち、それを表現しながら社会への参加・参画を考えていく力である。

折しも平成23年3月11日、東日本大震災が起こった。被災地の惨状はここで述べるまでもないが、この地震の発生により、被災地から離れた広島の地でもさまざまな日本社会の課題を目の当たりにした。電力供給における課題が最たる例であろう。私たちはこのまま原子力発電に頼っていくのか、それとも節電を掲げ、脱原発路線を歩み始めるのか、まさによりよい社会を求め、国民一人一人の主体的な意思決定や意思表示が求められる場ではないだろうか。

一方、被災地からは、社会に主体的にかかわろうとしている子どもたちの姿が伝えられている。例えば、自ら「青年協力隊」と名乗り防犯パトロールを行う子どもたち。炊き出しに参加する子どもたち。避難所で新聞を作成・掲示している子どもたち。まさに目の前の課題・惨事に対しても柔軟に対応し、現実の社会に参加している姿ではないだろうか。

教育基本法の第1条「教育の目的」には、以下のように記されている。

「教育は、人格の完成をめざし、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

これは学習指導要領に示された社会科の目標とも重なる文言が多い。公民的資質の基礎を養い、よりよい生き方を問うことをねらいとする社会科教育の果たす役割が、極めて大きくなってきているといえる。

## (2) 社会科授業の実態

児童は、「おもしろい社会科」を期待している。また、「学習していることを分かりたい」という願いをもっている。しかしながら、「社会科がおもしろくない」と感じる児童が多いのが現実である。

身の回りのことを取り上げて学習を進めてきているが、いつの間にか子どもの意識が学習していることと自分の生活とが離れてしまっていることがその要因として考えられる。例えば、「身の回りの製品をつくる工業の様子」を学習しているときは、自分の生活との関連を児童は見出しているが、工業地帯や工業地域の学習を通して日本全体の工業の特色を学習したり、貿易を通して諸外国とのつながりを調べたりするときには、自分の生活との関連を見出せずにいることが挙げられる。そのために、児童は暗記しているだけにとどまり、社会科がおもしろくないと感じているのであると考えられる。

また、社会の変化に気付くことのできる児童はいる。しかしながら、その変化はなぜ起きるのだろうか、その変化の要因を見付けようという関心を高めることができずにいる。

「自分で問題を解決してみたい」、「社会の仕組みを調べてみたい」という意欲に欠ける傾向にあるととらえている。

児童が、社会科の学習をこのようにとらえる背景としては、我々教師も教科書や副読本だけを使って、その内容を習得させることのみをねらいとした授業や社会見学などの体験的な活動はあるものの学習過程や指導の視点が曖昧で、結果として、何を学習したのか分からないような授業、学習問題やその予想がはっきりしないため、調べ学習はするものの、何のために調べているのか分からないような授業を数多く行っていることが考えられる。

## (3) 広島社会科のあゆみとこれからの方向性

広島社会科は、創設以来、子どもたち一人一人が変化の激しい社会の中で、豊かな心を持ち、主体的に生きることが出来る資質や能力、態度を身につけて育ててほしいという願いのもとに「学ぶよろこびがある社会科」、「考える社会科」、「地域の事象や人間の生き方から学ぶ社会科」を一貫して追究し、「広島社会科」として実践研究を重ね、その成果を絶えず全国に発信し続けてきた。

平成4年度の全国大会では、「人間の生き方にせまり、自ら学ぶ力を高める社会科学習—具体的な活動や体験を通して—」という研究主題を掲げ、具体的な活動を通して、思考、判断、表現できる能力の育成を図るという新しい学力観に立つ社会科教育の在り方を提案した。

また、3度目の開催となった平成17年度の全国大会では、「豊かに感じ、深く考え、と

もに高まり合う社会科学習—よりよい社会をつくるために、考え、判断する子どもをめざして—」を大会主題として、問題解決のための思考力・判断力を育むために、出会いと発見、感動のある学習材を開発し、子どもたち自らが問いを見付け、調べて考え、表現し、仲間とともに考えを深めていく社会科学習を全国に発信し、多くの賛同の声をいただくことができた。

その反面、「ともに高まり合う社会科学習」を受け、授業実践の場面では、関わりや考え合いという要素に重点を置いてしまったため、「話し合い活動が公開の目玉となっていて、確かにそれはうまくいったが、果たしてそれは社会科固有の学びなのだろうか。」という質問も投げかけられた。どの教科においても必要な学びは社会科においても必要であり、この授業の基本の上に成立する議論ではある。その上で「社会科らしい学びとは何か」という根本的な問いが、次なる課題として生まれた。

そして、平成17年度の全国大会から現在に至るまで、社会はますます複雑化し、混迷している。教育の分野においてもPISA型学力が広く注目されるようになったり、学習指導要領が改訂されたりしている。変化の激しい社会に対応していく子どもたちを育てるためには、今一度、不易である基本に立ち返り、社会認識の形成を通して、公民的資質の育成を図る教科である社会科の本質に迫る研究に取り組むべきであると考えた。社会科を専門教科とする教師にとっても、「教科書を読み取るのが社会科だ」としている教師にとっても、「これぞ社会科」と納得のいく授業を創造していきたい。

今回の研究主題の設定は、これまで広島の教師たちが築き上げてきた「広島の社会科」を継承しつつ、社会認識の形成と公民的資質の育成とはどういうことで、それはどうすれば実現できるのかを探る実践研究を進めるために提起するものである。

これまでの「広島の社会科」のあゆみ、現在の社会情勢、これからの社会を生きていく上で求められるもの、子どもたちの実態、旧研究主題のもとでの社会科実践上の課題等を総合的に鑑みながら研究主題を設定した。

## 2 研究主題について

### (1) 「社会を見つめ」とは

これからの時代を生き抜くためには、「自らの意思で社会をつくっていかこうとする意欲」や「その社会を維持し、発展させていく資質や能力」が求められる。

これらの力を育むために、まず、自分の住んでいる地域などの身近な社会的事象を見つめ、より確かな事実として認識した上で、社会的事象の意味や関係性、価値をとらえることが必要である。

研究主題の「社会を見つめる」とは、「社会を知る」、「社会がわかる」ことを指す。子どもが社会的事象と出会い、「どのように、どのような」と問い、事象の過程や特色・構造を表現するとともに、社会的事象に対して「なぜ、どうして」と迫ることにより、目的と手段、条件と結果、原因と結果の関係を表現することである。

混沌とする時代の中で、冷静に現代社会を見つめ、何が起きているのか、何が問題なのか、何が原因なのか、を分析する力は不可欠である。

「広島の社会科」では、問題解決的な学習における「単元を貫く学習問題」を設定することを大切にしてきた。そしてそれは、児童に確かな社会認識を形成するという社会科固有の目標にたちかえればこれまで以上に重要視していく必要がある。

## **(2) 「未来を問い続ける」とは**

「未来を問い続ける」とは、「社会に生きる」ことを指す。自分なりの意見や考えをもち、「何をすべきか、どのような解決策が望ましいか」を考え、表現しながら社会への参加・参画を模索していくことである。

現代社会に内在する問題をどのように解決していくのか、問題解決には何が必要なのか考えをめぐらし、これから先を見据える確かな目は必要不可欠である。

問題を正しく把握することができれば、新しい社会や未来をめざし、変革して、社会を明るくものにしていくための道筋や手段が見えてくる。そのために必要な資質や能力の基盤は多くあるが、とりわけ人の思いに共感し共有することができる心情や、様々な事象を多面的・多角的に考えたり、公正に判断したりすることができる力が必要である。そのような力を社会科の学習の中で育み、培っていくことをめざしたい。

さらに大事なことは、よりよい社会や未来の実現のために学び続け、調べ続け、考え続ける姿である。単元の学習中はもちろんであるが、学習が終わってからも学び続ける子どもたちの姿をこれまで以上にめざしていきたい。これは著しい社会の変化に主体的に対応でき、新学習指導要領でも理念が継続されたように生涯学習の基礎となる「生きる力」の育成とも深い関わりがあると考えられる。そして、究極的には問い続ける、学び続ける中で持続可能な社会、平和な未来の実現をめざすことに通じるものであり、社会に参画する態度も養われるものと信じている。

## **(3) 「社会科教育の創造」とは**

このような実践を進めるために、「自ら考え、自ら行動する」学習活動や「調べ、考える」学習過程、子どもたち一人一人のよさや可能性を生かし、ほめて育てるなどの学習支援活動と評価の工夫が必要となる。これはこれまでの「広島社会科」で大切にされてきたことである。だからこそ、「広島社会科」実践にこだわり、継承し、広島の子どもの育てていくことが重要である。教師も社会科学習を通して児童のあるべき姿をめざし、十分に指導力を発揮していく必要がある。

つまり、「社会科教育の創造」とは、学習内容・課題の設定の仕方、学習活動の連続性、指導と評価の一体化など教師の役割をも含めた、社会科の指導のあり方全体を再構築していこうとするものである。

## **(4) サブテーマ「学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力の育成」について**

サブテーマの「学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力の育成」は、主題を具現化する手立てを表している。学習意欲なくして、「社会を見つめ、未来を問い続ける」子どもを育てていくことはできないと考えたからである。

学習は学ぼうとする意欲に支えられ、社会科の学習も社会的事象やそれに関わる人々への関心から出発する。しかし現状は、社会や他者への無関心が広がり、それは今後ますます加速する可能性がある。これからの社会科を考え、「社会を見つめ、未来を問い続ける社会科」を実現する際、学習意欲は今まで以上に重要になってくる。

私たちが大切にしたい学習意欲とは二つあり、一つ目は授業で必要となる学習意欲である。例えば、子どもたちは教材とであい、調べる意欲が湧いたり、引き出されたりする。さらに学ぼうとする姿勢を持続させるためには、調べたことをもとにして、分かるという経験が必要となる。分かるためには、思考力や判断力が必要不可欠となる。また、自分の考えたことをより分かりやすく説明しようとするれば、言語活動を伴う表現力も必要となる。このように 思考・判断・表現したことに支えられ、学習意欲は向上していく。言い換えれば、学習意欲を高めるためには思考力・判断力・表現力を育成しなければならないと言える。

二つ目の学習意欲とは、授業後にも生きて働く学習意欲である。生涯にわたって「未来を問い続ける」子どもをめざすためには、その後にも続く学習意欲の種を授業の中にまいておかねばならない。その種は、自ら問題に気付くことの大切さを実感する場面であったり、その場限りに終わらない知識や見方・考え方を獲得し、その価値に気付いたりすることなどが考えられる。

つまり、サブテーマが表していることは、「学ぼうとする力」や、「学んだ力」を生かした「学び続ける力」を育成する授業をめざそうというものである。

### 3 研究主題に向けて育てたい力

「社会を見つめ、未来を問い続ける」子どもを育てていくためには、図 1 のような社会科授業の構造図を意識した授業づくりを考えていきたい。

社会認識を育てる場とは、過去、そして現在の社会認識を育てていくための授業の場である。実践的な力を育てる場とは、未来を問うていくため、または、新たな問題や他の学習への発展の場、単元を貫く学習問題に対して総合的に判断する授業の場である。単元の大きな流れで説明すれば、社会認識を育てる場は、「である」と「ふかめる」、実践的な力を育てる場は「いかす」という学習過程を経て、「社会を見つめ、未来を問い続ける」子どもの育成をめざしていくものである。これら二つの場をバランスよく単元の中に組み入れていくことを大切にしていきたい。そうすることで、社会認識を通して公民的な資質の基礎を育てていくという社会科教育の不易の部分大切に授業づくりをしていくことができると考えている。

社会を見つめ、未来を問いつける子ども			
	社会認識を育てる場		実践的な力を育てる場
	知識		理解
学習過程	である	ふかめる	いかす
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的事象と子どもとの出会いの場</li> <li>・学習問題をつくる場</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習問題の解決に向け、調べたことから考え、表現する場</li> </ul>
主に育てる力	問題発見力 (学習への関心・意欲・態度)		
	情報活用力 (観察・資料活用の技能)		
	思考力		
	判断力		
	表現力		

図1 研究主題に向けた社会科授業の構造図

以下、それぞれの学習過程において求められる力を説明していく。

① 「である」段階で求められる力

「である」とは、子どもが社会的事象と出会い、「どのように」、「なぜ」と問いを見付ける場である。この場では、社会で起こっている出来事を読み取るために、資料から必要な情報を読み取ったり、資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえたりすることができる資料活用の技能が求められる。例えば、ごみの収集量の変化を表した統計資料から、ごみが増え続けているという事実を読み取ることができる力である。

しかし、この場で主に育てる力として、問題発見力を位置付けている。問題発見力とは、社会的事象と出会った子どもたちが、事象に関心をもち、それを意欲的に調べようとする関心・意欲・態度に基づいて、問いを見付けることができる力である。例えば、家庭から収集所に出されたごみがなくなっている事象に出会った子どもたちが、「どのようにして、ごみがなくなったのだろうか？」という過程や構造を知るための問いを発見することができる力である。他にも、ごみの収集量が増え続けている事象に出会った子どもたちが、「なぜ、増え続けていたごみの収集量が減ってきているのだろうか？」と社会の背景が分かるための問い、「どうしたら、ごみの収集量を減らしていくことができるのだろうか？」と社会に参画するための問いなどを発見することができる力が挙げられる。このように、社会的事象に迫っていくために必

要な問題発見力は、「である」段階だけではなく、「ふかめる」や「いかす」のどの段階においても求められる力となる。

## ② 「ふかめる」段階で求められる力

「ふかめる」とは、一つは社会的事象に対して「どのように」、「どのような」と問い、事象の過程や特色・構造を表現する場である。もう一つは、社会的事象に対して「なぜ」、「どうして」と問い、目的と手段、条件と結果、原因と結果の関係を表現する場である。この場で求められる力は、必要な資料を収集する、複数の資料を関連付けて読み取る、複数の資料を収集したり選択したりする、資料を整理したり再構成したりするといった観察・資料活用の技能である。そしてこの技能を活用して調べたことから社会的事象の意味や関連性などについて「なぜ」と問うことに対して解決していくことができる思考力と考えたことを表出することができる表現力である。

## ③ 「いかす」段階で求められる力

「いかす」とは、「どうしたらよいか」、「どの解決策がより望ましいか」と問い、社会に内在する問題の解決のために合理的な手段・方法を判断する場である。この場で求められる力は、社会の問題に対してどうしたらよいか対策を考える思考力と、どの解決策が望ましいか価値を見極める判断力、そして、それらを表現していく力である。

また、この場はこれまで「広島の社会科」が取り組んできた学習段階の「ふりかえる」も継承している。つまり、新たな問題と他の学習への発展の場、単元を貫く学習問題に対して、学習をふり返りながら総合的に判断していく場でもある。これらの場でも、既習内容を活かしてまとめたり新たな問題を見付けたりするため、思考力や判断力、表現力が求められる。

このように、社会的事象に「である」ための力、「ふかめる」ための力、「いかす」ための力、いわゆる「学ぶための力」を育てていき、子どもが事象に対してイメージしている主観的な見方・考え方をより整合性の高い客観的な見方・考え方へと高めていくこと、そして、その見方・考え方を他の事象にも活用しながら仮説的に事象を見つめていくことができる見方・考え方へと向上させ、「学んだ力」として定着させていく必要がある。

もう一つ、忘れてはならない力が、学習に対する関心・意欲に関わる力である。この子どものやる気に関わる学力は、社会科授業を成立させるための基底をなすものであり、「学ぼうとする力」として、それを育てていくことも大切にしていきたい。

また、社会科学習を通して、未来を問い続けることができる子どもたちには、社会の一員として自覚をもってよりよい社会を考えていこうとする「学び続ける力」としての関心・意欲・態度も育てていきたい。

その他に、「学んだ力」として、広島子どもたちには、「平和」・「環境」をキーワードとした社会認識を深めていきたい。社会科改訂の趣旨には、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うための具体例として、「持続可能な社会の実現をめざすなど」と記されている。我々も含め、これからの未来を担っていく子どもたちにも、持続可能な社会の構築をめざして、社会とかかわっていく力を身につけていくことは、

急務である。特に「平和」に関しては、広島は世界で最初の被爆地として、これまでも世界に平和を訴えてきている歴史的な土壌がある。持続可能な社会を構築していくために、「平和」や「環境」というキーワードは避けて通ることができない大切な学習内容である。

これらの広島だからこそ取り上げることに価値がある内容や国際的に求められている事柄を社会科に取り入れることで、持続可能な社会を構築していくための基礎を育てていくべきだと考えている。

以上のような社会科授業で大切にしていきたい力を研究主題と照らし合わせた場合、思考力、判断力、そして、それらの力を授業の場で表出させていくための表現力は、その中核をなすものであり、それを育てていくことに重点をおいた社会科教育を創造していく必要性を導き出すことができる。

社会科は、基礎的な知識や概念・技能を活用して、社会的事象に対する「どのように」、「なぜ」、「どうしたらよいか」などの問いを追究していく教科である。その問いに答えていくために中核となる力が、思考力であり、判断力であり、表現力ととらえている。

この三つの力を育てていくことで、社会のことが分かり、社会と自分との関わりに気付いた子どもたちは、社会的事象に関心をもち、それを意欲的に調べる学習意欲に留まらず、社会の一員として自覚をもって、よりよい社会を考えようとする関心・意欲・態度が形成されていくと考えている。

#### <引用・参考文献>

- 広島市小学校教育研究会社会科部会『社会科研究のてびき』，平成16年
- 文部科学省「新しい教育基本法について」，平成19年
- 文部科学省「教育三法の改正について」，平成19年
- 広島市小学校教育研究会社会科部会『広島の社会科 第39集』，平成22年
- 北俊夫著『新教育課程と社会科の授業構想』，明治図書，2008年
- 小原友行編著『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン小学校編』，明治図書，2010年
- 岩田一彦著『社会科固有の授業理論30の提言』，明治図書，2009年
- 安野功著『授業実践ナビ社会』，文溪堂，2010年

### Ⅲ 研究の視点

#### 1 教材

##### (1) 学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力を育成する教材

これまでの授業は、教科書や副読本に示された教材・題材に基づいて、与えられた内容を教えるというものが多かった。しかし、教材とは達成したいねらいと子どもや時代のニーズに即して、授業者がより望ましいものを開発する必要がある。同時に、教材を媒介として、社会科の授業を積み重ねていくことによって、「思考力・判断力・表現力」を育て「学習意欲を向上」させていくことができると考えられる。

では、研究主題に基づく「教材」とは、どのようなものが考えられるだろうか。

一つ目は、「地域や時代の課題を克服するために工夫・努力・協力していった問題解決の姿」である。具体的には、「太田川放水路の建設」や「広島復興」などが考えられる。この教材は、人々が実際に課題を克服した姿を取り上げていることから、地域やその時代が抱えた課題を乗り越えていく人々の姿を通して、社会の在り方を考えるというものである。このような教材を取り上げることによって、目の前の課題を解決しようとする知恵と意欲を学習するとともに、地域をよりよくしようとした人々の姿から、地域に対する誇りをもつことができる。

二つ目は、「地域密着型の地域教材」である。具体的には、「お好みソース」や「セツブソウ（庄原市総領町）」などが考えられる。これは、その地域らしい素材を取り上げ、身近なところから社会を考えるというものである。これによって、子どもの主体的な学習を展開することができるとともに、地域に対する愛情を育てることにつながるができる。

三つ目は、「今日的な課題を解決していこうとしている人々の新しい問題解決の知恵」である。具体的には、「東北地方のかき業者への支援」や「環境問題への取組」などが考えられる。これは、現在抱えている社会的な問題や論争となっている問題を取り上げ、これを解決しようとする人々の姿から、解決策を考えるというものである。これによって、今日社会が抱えている課題に対する関心と解決しようとする意欲をもつことができる。また、人々の解決に向けての取組を通して、人々の問題解決の知恵を学習することができる。

ここでは、三つの教材について具体的な例を取り上げ、教材の特徴と研究主題・副題との関わりについて考えてみることにする。

##### ① 地域や時代の課題を克服するために工夫・努力・協力していった問題解決の姿

###### 第6学年「ヒロシマの復興」

###### ア 教材について

広島は、原子爆弾により壊滅的な打撃を受けた。復興の計画を立てるものの、なかなか計画通りには進まなかった。それは、原爆の被害による人口の激減や企業などの壊滅によって、十分な税収が得られなかったためである。しかし、当時の浜井広島市長らの尽力により、広島市を平和のシンボルとして、国を挙げて建設することが位置付けられた、広島だけに効果のある広島平和記念都市建設法が国会で可決された。

復興は市政のみに任されていたわけではなかった。例えば、広島市民球場は、広島

市民の「大きな球場が欲しい」という声からつくられたものである。広島市民球場は、広島市の財界人が建設を計画し、財界からの寄付や広島市民による募金によって、建設資金を集めた。また施設用地は、平和記念都市建設法によって、国有地だった中島公園の一部を国から無償で譲り受けたことで、建設が実現した。

#### イ 教材と研究主題・副主題との関わり

この教材は、税収の減少によって、広島市民の思いや願いを実現できないという問題に直面しながらも、国からの支援に解決策を求め、特別法を制定できるように努力し続け、広島市民の思いや願いを実現しようとした当時の人々の姿を示している。

市民自らの参画により、自らの手でよりよい広島を築こうとする市民の姿から、県や市という地方公共団体や国という行政だけに任せるのではなく、自らが主体者となり、それを実現するために行動していく必要があること、市民と市政が両輪となって地域発展に貢献していく必要があることを学ぶことができる。まさに、「未来を問い続ける」学習ということができると考えられる。

### ② 地域密着型の地域教材の具体例

#### 第4学年「セツブンソウ（庄原市総領町）」

##### ア 教材について

セツブンソウは、現在その姿を見ることはあまりなく、環境省・広島県指定準絶滅危惧種になっている。

セツブンソウは、春先に芽を出し、5月頃には結実して地上は枯れ、地下の塊茎で翌春まで眠りにつく。その間、他の植物が生い茂ったり、他の草が枯れて積もったりすると次の春に芽を出すことは難しくなる。さらに、この花は南向きの日当たりの良い斜面より、北向きの斜面を好む傾向がある。

こうした生態に適した地域が庄原市総領町である。総領町は、山中の狭小な谷間に集落が点在し、耕つく地の確保が難しい土地であった。その結果、耕つくに適した日当たりの良い土地は田畑になり、山すそや日当たりの悪い斜面などに住居や墓地が作られた。

人が住んでいれば、少なからず手入れが行われるが、他の地域では、田畑を耕す人がいなくなり、荒れていくとともに姿を見せなくなった。一方、総領町では、セツブンソウが好む、決して好環境とはいえない土地に人々が住まわざるを得なかったことで、セツブンソウは、生き長らえることができた。その結果、総領町は、セツブンソウの日本有数の自生地となったのである。

現在では、セツブンソウという地域の資源を守るために、土地所有者の管理だけではなく、「節分草保存会」というNPO法人を設立し、定期的な草刈りや電気柵の設置を行っている。毎年3月には、自生地を公開したり、「節分草祭り」を開催し、栽培したセツブンソウを販売したりしている。

##### イ 教材と研究主題・副主題との関わり

「なぜ、総領町でセツブンソウが広く残っているのか。」という問いを追究していくことで、先人の農地の工夫、努力してセツブンソウを守る人々の思い、農村の過疎化・高齢化問題、里山の活性化策まで学ぶことができる。それは、農業の衰退と農村の過疎化という、現在の日本各地で起こっている問題を反映している。この学習を通して、今日抱える問題を解決する知恵を学ぶことができると考えられる。

地域の教材を取り上げることは、親近感をもち、自らの地域の課題を主体的に学習することができる。さらに、自らの経験を根拠にして、思考、判断をすることも可能になる。このような活動を通して、地域に対する愛情を育むことができると考えられる。

### ③ 今日的な課題を解決していこうとしている人々の新しい問題解決の知恵

#### 第5学年「わたしたちの生活と環境(太田川のシジミを取り上げて)」

##### ア 教材について

太田川は、広島市内の中心部を流れ、広島湾に注ぐ河川である。広島市民のみならず、近隣市町村の水がめとして大きな役割を担っている。水の確保だけでなく、アユやシジミなどの水産物が育つ場ともなっている。

昭和30年代後半からの高度経済成長期に入ると、太田川下流域では、急激に人口が増加し、多くの工場が進出した。これによって、工場廃水や家庭排水が太田川の水質汚濁や富栄養化をもたらし、底質のヘドロ化が進んでいった。

度重なる洪水被害への抜本的な対策として、昭和42年には、太田川放水路、昭和49年には、高瀬堰が建設された。これによって、水量が減少し、汚濁原因物質（窒素・リンなど）が停滞しやすくなることとなった。

一方、シジミは、汽水域の砂地に好んで生息するため、太田川の最大の問題であるヘドロ化の影響を強く受ける生物である。その漁獲量の変化をしてみると、昭和40年の300tをピークに急速に減少し、昭和50年にはわずか9tにまで落ち込んだ。

こうした事態に対して、広島市では、生活排水が直接河川に流入しないように努めてきた。太田川河川事務所や広島市内水面漁協などが主体となって、植林活動や清掃活動に取り組んだり、ヘドロの減少に効果があるとされる石灰や微生物をまいたりして環境改善を図ってきた。市民にも、太田川の環境改善への意識が高まり、自治体が開催する清掃活動や親水事業に多く関わっている。

##### イ 教材と研究主題・副主題との関わり

シジミの減少に見られる太田川の環境悪化は、よりよい生活を求めすぎた結果、起こった環境問題であると考えられる。そこには、河川改修工事による「洪水対策」と「環境悪化」というジレンマを抱えた背景がある。これは、広島市のみならず、日本各地で起こった環境問題と背景を同じくしている。

子どもにとって、身近な環境問題を取り上げることは、学習意欲を喚起する上で重要な役割を果たす。意欲だけではなく、自分の身近な生活と環境問題を結び付けて考えることも可能となる。そして、太田川の環境改善に取り組んでいる人々の活動を通

して、地域社会に参画する必要性を感じることができると考えられる。これらのことから社会科の学習そのものへの意欲と同時に、社会へ参画する態度の基礎を培うことができると考えられる。

## (2) 素材から教材へ

では、教材は、どのようにして教材へと整理されていくのだろうか。ここでは、その手順の一例を示すこととする。

### ① 目標の明確化と教材の選定

目標とは、その授業における明確なビジョンである。社会科では、事象からどのような社会を認識させ、どのような力を付けるのかということとなる。授業の方向性を決めるのは、目標であり、目標を焦点化することによって、学習内容が明確になり、それに適する教材が選択されるのである。目標に基づいて教材が設定されるのであって、教材ありきの授業では、目標も内容も不明確となる。

目標を定める際によりどころとすべきものは、学習指導要領

である。学習指導要領に規定してある内容を鑑み、その授業の目標と教材を設定することになる。

一方、学習指導要領には、盛り込まれていない事象も考えられる。指導要領に規定してある題材のうち、地域に根差したものや現在、まさに起こっていることから授業をつくることも考えられる。空間的・時間的な身近さをもった素材を見付け、教材とすることによって、授業者が日々の生活の中で出会った考えさせたい事象や教えた、伝えたい内容に基づく、授業者独自の主体的な授業づくりとなる。

上述の第4学年「セツブンソウ（庄原市総領町）」を例に考えてみたい。学習指導要領には、地域資源を保護・活用した特色ある町づくりや観光などの産業の発展によって、地域の活性化に努めている事例から、県の特色ある生活について考えることが規定されている。広島県は、人口が多く、産業が発達した都市部と比べて、山間部は、高齢化や過疎化から地域の活性化が課題となっている。

このように、学習指導要領の内容と現代社会の実態を考慮して目標を設定し、それを達成する題材として、地域教材であるセツブンソウをめぐる総領町の取組が適していると考えられる。

### ② 教材の構造化

授業の目標とそれに基づく教材が決定すると、そこで教えるべき内容が明確となる。

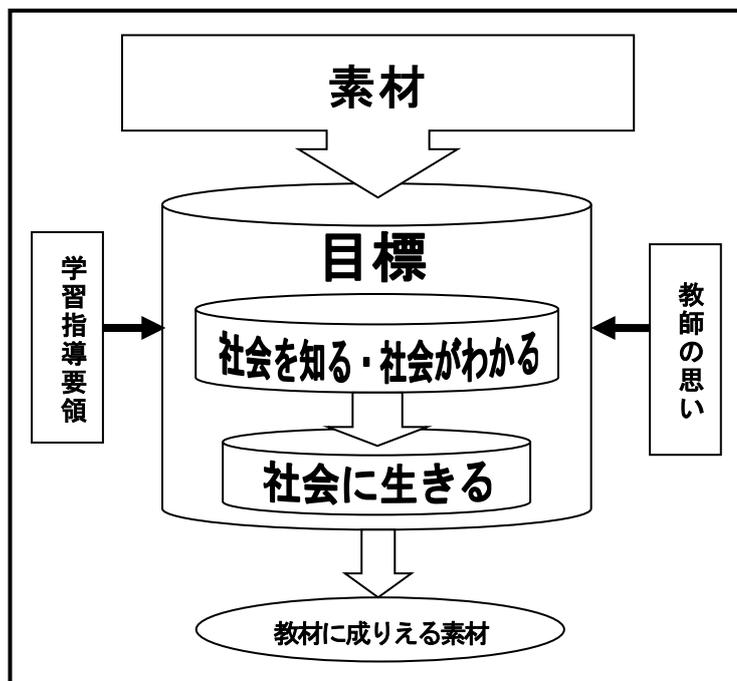


図1 素材選定のイメージ

教材は、それぞれの内容の関係から、構造的にとらえる必要がある。それは、社会科の授業で扱う実社会が、様々な事象の結び付きによってできているからである。新学習指導要領においては、社会認識をする際に、事象と事象の関係を考えたり、関連付けたりすることが求められている。したがって、その教材がもつ事象の関係を明確にすることによって、その授業で何を教えるのかが明確となる。そこに教材を構造的にとらえる意義がある。

## ア 対比的な構造でとらえる

下の図 2-1 は、「ヒロシマの復興」における取組を「広島市民」、「広島市（行政）」の側から迫り、時系列で見ていくことによって、どの時代も市民・行政が協力してよりよい社会を創ることを示している。

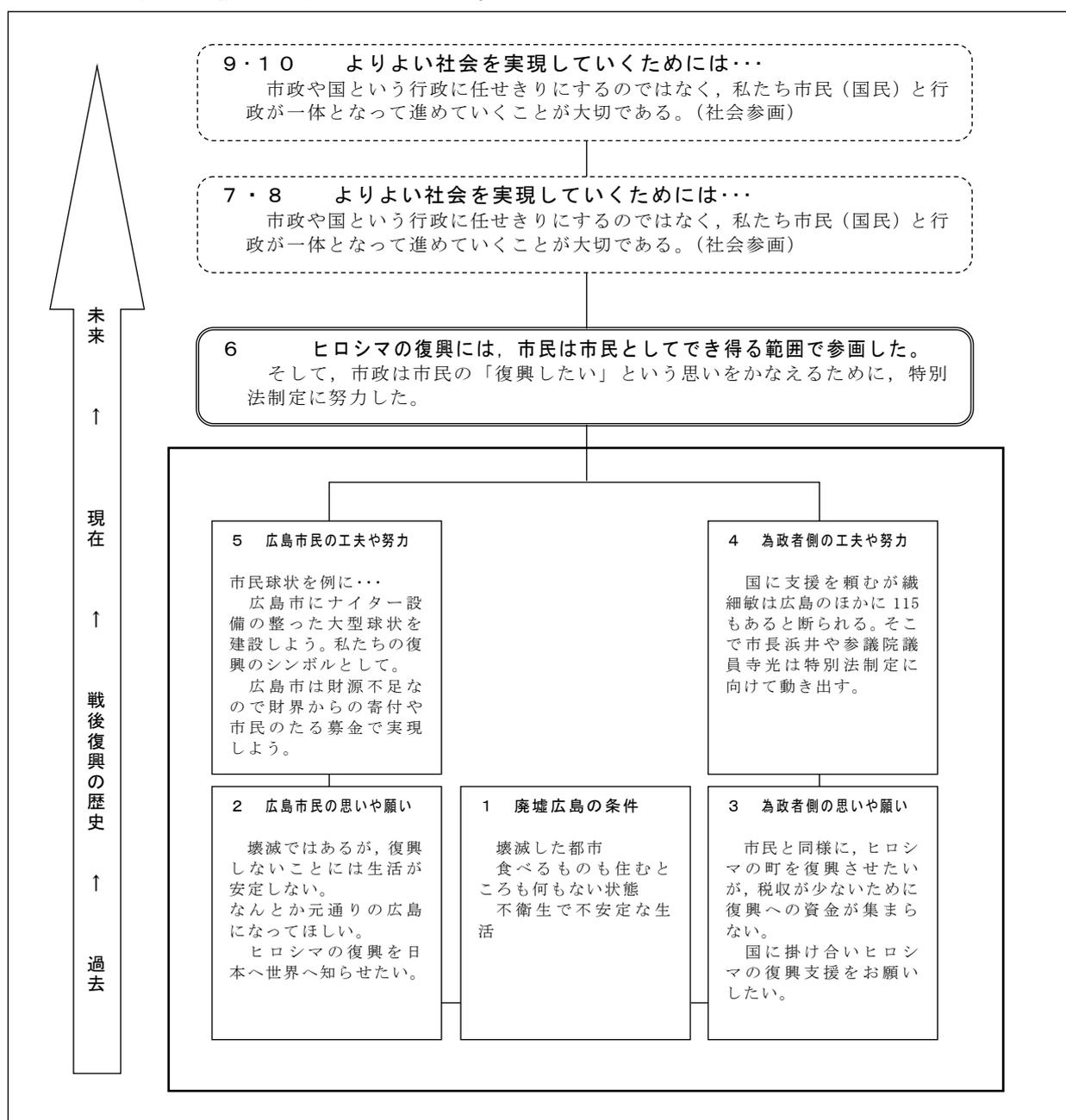


図 2-1 「ヒロシマの復興」教材・内容の構成

この図を通して、広島復興に関わる事象や内容のつながりが見えてくるとともに、この授業におけるねらい・主題を明確にすることができる。また、この構成が広島復興が進んでいくストーリーとなり、この流れがそのまま単元構成となる。

### イ 因果的な構造でとらえる

下の図 2-2 は、「セツブンソウ（庄原市総領町）」において、総領町でセツブンソウが広く残った理由が総領町の環境と総領町の人々の努力から成り立っていることを示している。そして、それを時系列で配置することによって、過去の総領町やセツブ

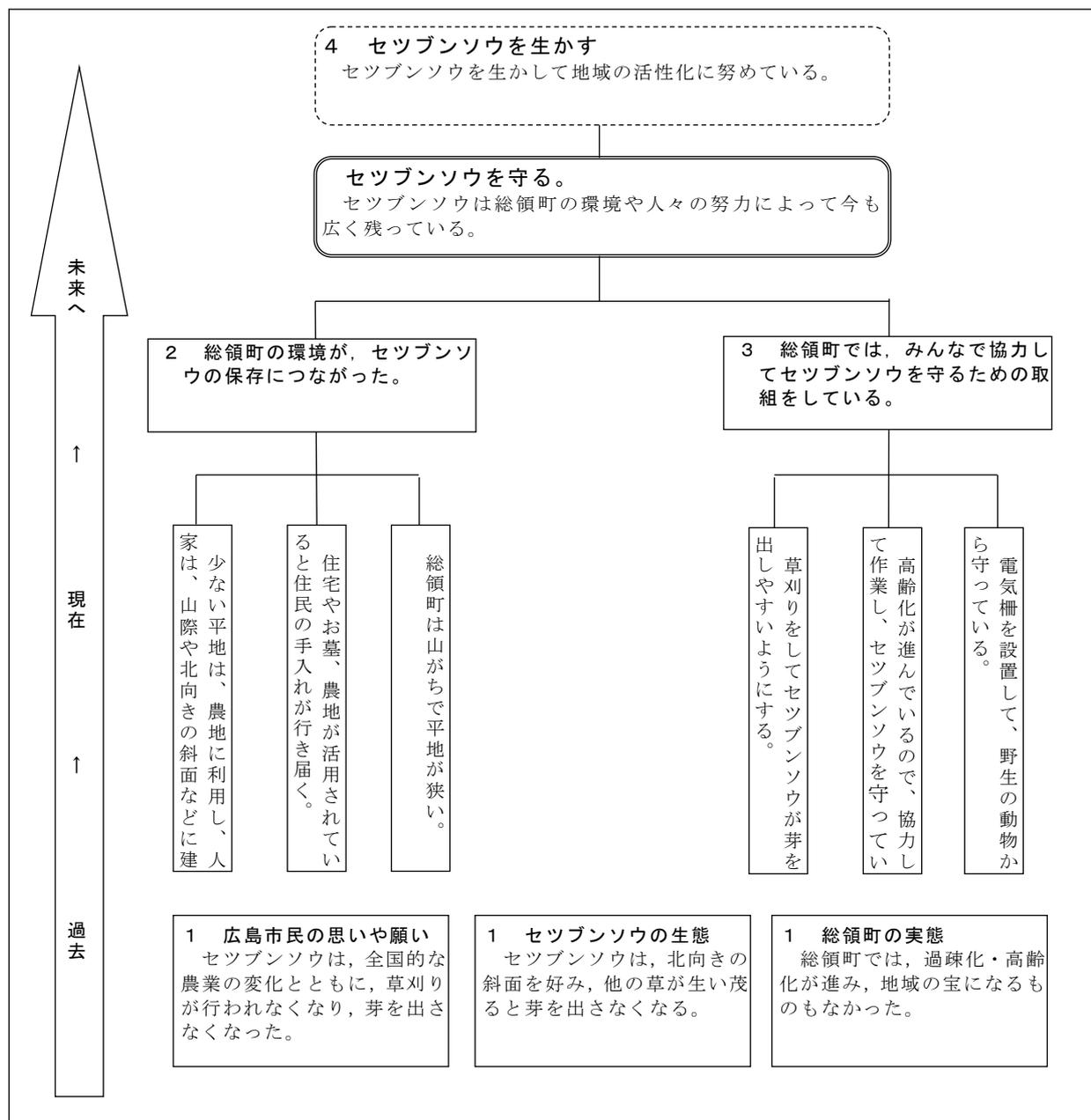


図 2-2 「セツブンソウのまち総領町」教材・内容の構成

## ウ 帰納的な構造でとらえる

次の図 2-3 は、「スーパーマーケット」、「コンビニエンスストア」それぞれの特徴や工夫を挙げ、それらすべてが商店それぞれの客を引きつける戦略であることを示している。いろいろな事実を集約して見えてきたことから、その本質を見出すという帰納的な構造が考えられる。

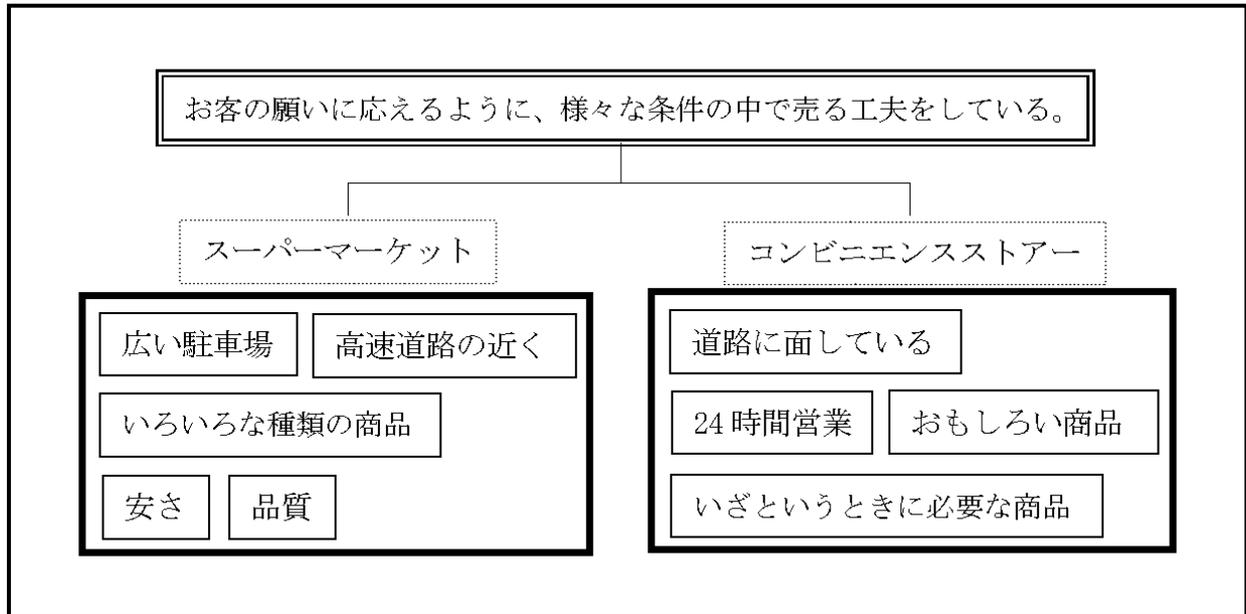


図 2-3 「わたしたちの暮らしと商店の仕事」教材・内容の構成

この例から分かるように、構造図は、一つ一つの事象の関係や関連付けから見えてくる、社会の有り様やそれらを包括的にまとめた概念から成り立っている。同時に、考えさせたい事象から、目標達成するための一つ一つの内容を見出し、そこから見えてくる社会とは何かを明らかにしているといえる。

これらは、教材開発における授業者側の思考のプロセスとなっている。このプロセスを反映させる形で、授業が展開されるはずであり、それは学習者側の思考のプロセスともなるはずである。

教材を構造的にとらえることによって、単元の中心発問や一時間の授業の目標、板書を構造的に計画することまで、容易になると考えられる。

### ③ 教材を授業へ

構造的に教材をとらえたら、目標に沿って単元計画を立てることとなる。

単元計画で最初に行うのは、最終的に学ばせたい内容、つまり教材の構造における最上位概念を理解目標として定め、それに対する発問を学習問題として据えることである。それを追究していく形で単元計画が構成される。見学や資料収集などを組み込むこともあるが、どの時間でどの事実を獲得させたり、思考させたりするのかを明確にしておきたい。これは、探究的な学習を行う場合の基本的な形になる。

具体例を基に考えてみる。「セツブンソウ（庄原市総領町）」の学習で、セツブンソウが地域の自然環境に適合するとともに、人々の思いと努力によって守られてきたことを学ばせたいと考え、「なぜ、セツブンソウは広く残っているのか」という単元を貫く学習問題が立てられる。

すると、導入では、セツブンソウの生態や準絶滅危惧種に指定された経緯を知り、総領町で広く残っていることに疑問を抱くようにしなければならなくなる。「ふかめる」場面では、総領町の航空写真などと、セツブンソウの生態を結び付けて、

セツブンソウにとってよい環境が残っていたこと、人々の思いと努力によってセツブンソウが生き続けてきたことに気付かせる必要性が出てくる。さらに、単元の最後に、総領町の人々がセツブンソウを生かしている取組を調べる活動や、自分なりの生かし方を考えるなどの活動を設定して、未来を問い続ける姿勢を養えるように構想するのである。

このように、単元を貫く学習問題→結論という骨組みがしっかりしていると、一時間の授業やそこで獲得すべき内容は、おのずと決定してくるのである。

以上のように、単元の構想を練ったら、一時間一時間の授業の目標と内容を考え、順序を検討して単元計画を立てていくのである。

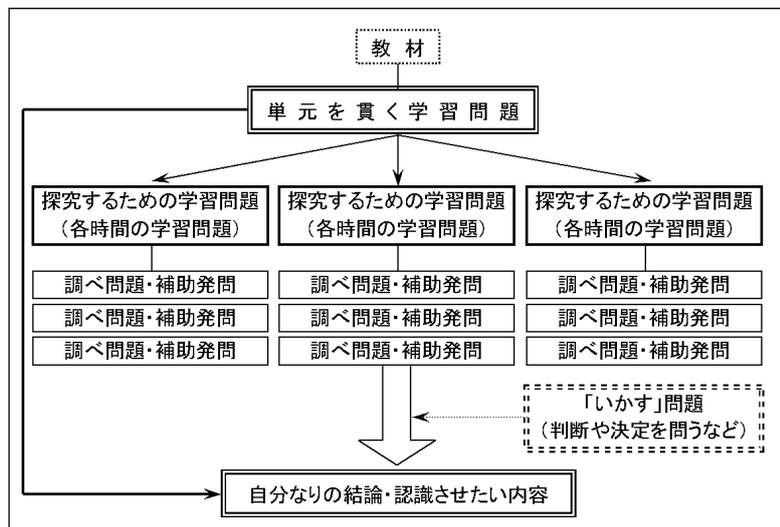


図3 発問の構造

## 2 学習過程

### (1) 学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力を育成する学習過程

子どもたちは、学習する内容を分かりたいと思っている。そして、分かったことが次への学習意欲につながっていく。さらに、分かったことを生かして新たな問題にチャレンジすることで、できるようになった自分を実感し、社会で起こっている様々な出来事に対して関心を持ち、その仕組みや背景、関係性などを知りたい・分かりたいという思いを抱くようになる。

そのような子どもたちを育てていくためには、社会のことを知ったり、社会のことが分かったり、社会に生かしたりしていく力が求められる。その中核をなすものが、思考力・判断力・表現力である。これらの力を、社会科の中で育てていくための学習過程は、どうあるべきなのだろうか。学習過程は、弾力的に考えていくべきではあるが、ここでは、基本的な学習過程について挙げてみる。

### (2) 基本的な三つの学習過程

第1段階「であう」・第2段階「ふかめる」・第3段階「いかす」の3段階を基本的な学習過程とする。その中の第1・2段階である「であう」「ふかめる」段階は、主として社会認識を育てる場、「いかす」段階は、実践的な力を育てる場として位置付け、社会認識と市民的・公民的資質の両面をバランスよく単元の中に配置できるように意識していきたい。

#### ① 「であう」段階

社会的事象に出会い、学習問題をつくり、学習計画を立てる段階である。

#### ア 社会的事象（教材）と出会う

単元の中で学習していく社会的事象との出会いは、単元の導入部に当たるものである。そのため、これからの学習に対する子どもたちの関心や意欲を高めることができる出会いを大切にしたい。

その方策の一つとして、驚きと発見のある事象との出会いが考えられる。

#### □ 驚きや発見のある事象との出会いの具体例

- ・ 生産量が日本一の広島かき  
日頃、店頭で見かけたり食したりしているかきの生産量は、広島が日本一で、しかも半分以上の生産量を誇っていることを知ることで驚きや発見のある出会いとなる。
- ・ 今とは違う道具を使って生活していた昔の人々  
郷土資料館で昔の道具を観察し、今は使われていない道具を昔の人たちが使って生活していたことを知ることで、驚きや発見のある出会いとなる。
- ・ 米づくりが盛んな東日本  
主食である米は日本全国でつくられているが、生産量を都道府県別に分類すると、東日本での生産量が多いことを知ることで、驚きや発見の

ある出会いとなる。

- ・ 約260年も続いた江戸時代

約100年も続いた戦国時代終期、織田信長や豊臣秀吉が全国統一を目指していったが、それは十数年しか続かなかった。しかし、その次の時代である江戸時代は260年間も続いたことを知ることで、驚きや発見のある出会いとなる。

これらの事象を、実物や写真、統計資料などを提示しながらそれらを読み取らせることで、子どもたちが主体的に知識として獲得していくことができるようにすることを大切にしていきたい。

## イ 学習問題をつくる

驚きと発見のある事象と出会った子どもたちは、素朴な疑問を抱くようになる。それは、「どのようにしているのだろうか?」、「なぜだろう?」という疑問である。

先の例で述べれば、広島のかきの生産量は日本一である事象に出会った子どもたちは、「なぜ、広島のかきの生産量は日本一なのだろうか?」という疑問を抱くであろう。昔の人々は、今とは違う道具を使って生活していた事象に出会った子どもたちは、「どのようにして昔の道具を使っていたのだろうか?」という疑問を抱くであろう。このような子どもたちの中から素朴にわき出てくる疑問を出し合っていくことから学級全体の学習問題がつくられていく。

その際、単元を貫く学習問題を設定できるように配慮したい。そうすることで、子どもたちも教師も、その単元における学習を計画的に進めていくことができる。

## ウ 学習計画を立てる

学習問題ができれば、その予想を立てることができる。その予想を検証していくために、「～が分かれば解決できる。」、「～で調べれば資料があるのではないか。」こう考えることで、何をどのように調べていけばよいかが見えてくる。このようにして学習計画を立てていく。

### ② 「ふかめる」段階

子どもたちが調べたことや提示された資料から、社会的事象の仕組みや背景、関係性などを考え、表現していく段階である。

## ア 調べたことから考え、表現する

学習問題の解決に向けて、個人やグループで調べていく。その過程では、以下の学習活動を取り入れて実践していきたい。

- 1) 適切な方法で情報を収集する。
- 2) 収集した情報を整理し分析する。
- 3) 分析したことをもとに自分たちなりの結論を出す。
- 4) 分かったことだけでなく、調べた結果から考えられることをまとめる。
- 5) 自分たちが調べた結果を適切に伝える方法を考え、発表する。

## イ 学習問題に迫る

学習問題に対して、調べた結果を基に、その解決に向けて話し合う。自分やグループの結果だけではなく、他の意見を聞き取り、比較・検討していくことで様々な見方ができるようになってくる。ただ、子どもたちが調べたことだけに依存した場合、社会的事象の仕組みや背景、関係性などに、深く迫っていくことは難しい。

また、誤った解釈をしている場合もある。そのため、教師の指導力も十分に発揮したい。例えば教師の切り返し発問や新たな資料の提示などで、経済的な視点や国際的な視点、政治的な視点、歴史的な視点など、様々な社会的な見方・考え方で事象の仕組みや背景、関係性などを分析していくことが考えられる。これが「ふかめる」ということである。

### ③ 「いかす」段階

学習問題を解決していく中で習得していった知識や社会的なものの見方・考え方を生かしていく段階である。具体的には、以下の三つのものが挙げられる。

## ア 社会参画型

社会的問題に対して、その解決策を考え、表現するものである。考えられる解決策の中からより合理的と思われる方法を判断していく意思決定に迫る授業として取り扱うことができる。また、よりよい解決策を模索し実際に社会に働きかけていく授業としても取り扱うことができる。

例を挙げると以下のような学習問題の設定が考えられる。

- かきの生産量を増やしていくためには、どうしたらよいだろうか。  
(中学年)
- ごみの量を減らしていくための解決方法を考えよう。(中学年)
- 自給率を上げていくためには、どうしたらよいだろうか。(第5学年)
- 日本の関係の深い国々と、どのように交流していけばよいのだろうか。  
(第6学年)

## イ 活用型

新たな問題や他の学習へ発展していくものである。

新たな問題への発展とは、まだ解決していない部分や新たに生まれた問題について、自分なりにこだわりをもって学習し続けることである。発展的な学習として取り扱うこともできる。

他の学習への発展とは、他の事例に置き換えて事象を分析していくことである。例えば、中越沖地震の復興について学んだことを生かして、東日本大震災の復興の未来を考えるとというものが、その一例として考えられる。その他にも、以下のような学習問題の設定が考えられる。

- 自分たちの住む地域のように、広島市も場所によって違いがあるのだろうか。(中学年)

- 総領町の他に、地域の資源を守ったり活用したりしながらまちづくりをしているところはあるのだろうか。(中学年)
- 水俣市のように、広島市でも環境のことを考えた取組はなされているのだろうか。(第5学年)
- 戦国の世では、広島県でも争いがあったのだろうか。(第6学年)

## ウ 振り返り型

学習を振り返りながら、総合的に判断するものである。例えば、「であう」段階で立てた単元を貫く学習問題について、「ふかめる」段階で学習してきたことを振り返りながらまとめていき表現していくことである。「これから先、米の生産量はどうなっていくとよいだろうか?」という学習問題に対して、調べたことから考えて、意見を交流していく中で、最終的な自分の考えを判断し、表現することがこれに当たる。

このような学習を進めていく際には、単元を貫く学習問題に対してその答えを導き出していく単元を構成し、問いと答えの構造を明らかにした授業づくりを展開していくことがより求められる。例を挙げると以下の学習問題の設定を考えることができる。

- わたしたちの学校の周りには、場所によってどのようなちがいがあのだろうか。(中学年)
- 広島県は、世界とどのような関わりがあるのだろうか。(中学年)
- 情報ネットワークは、わたしたちの生活にどのような影響を与えているのだろうか。(第5学年)
- 戦争が終わってから、日本はどのように変わっていったのだろうか。  
(第6学年)

その他にも、学習したことを振り返りながらポスターや新聞等にまとめていくという学習も考えられる。例えば、中学年で広島県の様子について学習した子どもたちが「広島県を世界に紹介しよう」というテーマでポスターづくりをしたり、5学年で工業について学習してきた子どもたちが「日本の工業の特色をまとめよう」というテーマで新聞づくりをしたりするものがこれに当たる。

### (3) 具体的な実践例

これまで、学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力を育てていくための学習過程とその具体例を断片的に述べてきたが、ここからは、第3学年単元「わたしたちのくらしとものをつくる仕事ーかきを育てる仕事ー」を事例に、単元を通した具体的な実践例を示しておきたい。

学習過程		学習活動と児童の反応	支援・留意事項
社会 あ う 認 識 を 育 て る 場	社会的事象と出会う	① 広島で有名なものを発表していく中で、かきの生産量が日本一であることを知る。	○ グラフや視覚的資料を用いながら、全国生産量の60%を占めていることを実感できるようにする。
	学習問題をつくる	② 広島のかきの生産量が日本一であることから、これから学習していきたいことを考え、学習問題に対する予想を立てる。	○ 出された学習問題の中から、より社会のことが分かるものを選ぶことができるように話し合い、学習問題を絞っていく。
	なぜ、広島のかきの生産量は、日本一なのだろうか？		
		<予想> ・ 広島湾にかきがいっぱい流れてきているから ・ 広島湾にはかきのえさがたくさんいるから ・ かきを釣る道具が工夫されているから ・ 他の所よりも昔からかきを取っていたから	○ 予想段階なので、どのような意見でも肯定的に受け止めるようにする。
	学習計画を立てる	③ 何を調べていけば、学習問題を解決できるか話し合い、適切な調べ方を選んでいく。 <調べていくこと> ・ かきって、どのような生き物なのだろうか？ ・ どのようにして、かきは育てているのだろうか？ ・ なぜ、かきは広島湾にたくさんいるのか？	○ 予想に対して、繰り返し発問をすることで、かきについて分かっていない自分に気付くことができるようにすることで、学習意欲を喚起する。
ふ か め	調べたことから考え、表現する ↓ ↑	④ かきそのものの生態を調べ、予想を検証していく。 ・ かきは、魚を釣るみたいにしていてではなく、人	○ 分かったことから、予想段階の考えと当てはまらないものを選びながら、学習

る 学習問題に迫る

の手で育てているんだ。  
・ 人の手で育てることを、養殖っていうんだね。

問題に迫っていく。

⑤ 広島のかきの養殖方法を調べる。

- ・ 約500年も前から養殖されていたんだね。
- ・ いろいろな人や施設が、様々な養殖法をみ出していったんだね。
- ・ いかだになって、たくさんのかきが養殖できるようになったんだね。

○ いかだ式垂下養殖法によって養殖できる範囲が広がり、生産量が増えていったことに気付くようにする。

⑥ 広島でかきの生産量が日本一になっている地理的（地形的・自然的）な理由を調べる。

- ・ 広島は島に囲まれていて、いかだでの養殖に合っているんだね。
- ・ 太田川から栄養のある水が流れてきているから、かきのえさがたくさんあるんだね。
- ・ 他にも日本一になっている理由があるのではないかな？
- ・ たくさん養殖しても、売れなければ日本一にはなれないよね。

○ 生産量第2・3位の宮城県、岡山県の海の様子を地図から読み取り、広島との違いに気付くことができるようにする。

○ 島の数が多い長崎県がかきの生産量日本一になっていないことから、他の要因にも目を向けることができるようにする。

⑦ 日本一になっている歴史的・経済的な理由がないか調べる。

- ・ 小林五郎左衛門という人が、大阪でかきを広めたんだね。
- ・ 大阪での火事がきっかけで、広島のかきがたくさん売れるようになったんだね。

○ 教科書の記述や調べたことを基に、他の要因に気付くことができるようにする。

⑧ かき養殖業者の抱えている問題点について調べ、まとめる。

- ・ 赤潮やかきのえさが減ってきたことで生産量が減ってきているんだね。
- ・ かきの人気下がってきて、かきの値段も下がってきているんだね。
- ・ かきから中身を取り出す作業が大変で、働き手がな

○ 日本一の生産量を誇る広島のかきを養殖している人には、悩み事はないのか問うことで、抱える問題点を導き出すことができるようにする。

○ 子どもが予想したことを検証するために、かき養殖

			かなが見つからないだね。	業者の抱える問題点について聞いたインタビュー映像を用意する。
実践的な力を育てる場	い	社会参画型の学習過程の一例 めざす社会を考える	⑨ かき養殖業者の願いについて考える。 ・ 生産量を増やしていきたいだね。 ・ かきが高く売れるようになってほしいだね。 ・ かきの中身を取り出す作業が楽にしたいだね。	○ かき養殖業者が抱える問題点の裏返しだが、願いにつながることに気付くことができるようにする。
	か		めざす社会にするための現状の問題点を分析する。	○ 学習活動⑧を想起させることで、問題点に気付くことができるようにする。 ○ 出てきた問題点が、かき養殖業者の三つの願いと、どのように関係しているのか考えることで理解が深まっていくようにする。
	す	問題点の解決のためにできる対策を考える。	⑩ 前時に出てきた問題点を解決する方法を考える。 ア 山にたくさん木を植えたらいいよ。 イ 山の木を切らないように看板をつくらう。 ウ たくさんの人が食べられるかき料理を開発したらいいよ。 エ かき料理を開発するだけでなく、紹介もしないとけないね。 オ 森への募金をしてもらって、木を植えたらいいよ。 カ かきの殻を森にまくと肥料になるかもよ。 キ かきの中身を取り出す機械を開発するといいよ。 ク 広島の人たちに、排水を減らすように呼びかけよう。	○ 子どもが考えた対策が、どの願いを実現することにつながるのか、どの問題点を解決することにつながるのか考えることで、より整合性のある対策を考えることができるようにする。
	な	対策の優先順位を決め、めざす社会に近づくためのプログラムをつくる。	⑪ 対策の順番を考え、協議する。 ・ 対策の順番は、ウ→エ→ク→オ→ア→イ→カ→キがいいと思います。理由は、先にクをしても少しの消費者し	○ 対策の順番の根拠を協議していく中で、より整合性のある対策の順番を考えることができるようにする。

		<p>か協力してくれないけど、ウ・エを先にするとかき料理を食べておいしかった人が「おいしかったから食べてみて!」とか言ってどんどん広まっていくと思うからです。そうしたら、クの対策をしてもたくさんの人が協力してくれるようになると思います。</p>	
<p>実際に実行されている対策を知り，自分のあり方を考える。</p>	<p>⑬ 実際に行われている対策について知り，学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分たちの考えた対策は，全部していました。かきの中身をとる機械がもうできているなんてびっくりしました。それ以外にも，かきを買ったらお金が募金されて植林につかわれるような仕組みになっているところもあったり，かきカレーという料理が開発されていたりして，いろいろな人たちがすごいことを考えているなと思いました。広島のかきをこれからもたくさん育ててほしいので，かきを買って募金したり，かきカレーを買ったりしていきたいです。</li> </ul>	<p>○ 自分たちが考えた予想と実際に行われている対策とを比較することで，多くの人たちが，広島のかき養殖を守り育てるために協力していることに気付くことができるようにする。</p>	

### 3 学習活動

子どもが、社会的事象を読み解く力を身に付け、学習意欲を向上させていくためにはどのように学習活動を進めていけばよいのだろうか。

小原顧問は、平成 23 年度広島市小社研夏季研修会での講話で、下の表のように話された。

表 1 思考力・表現力・判断力を育成する学習活動

活動の種類	目的	発問と活動内容
「知る」ための活動	「資料から必要な情報を集めて読み取る」 用意された教材に関して発見した学習問題を解決するために必要な情報を収集する。	社会的事象や問題に、「どのように、どのような」と問いかけ、収集した資料からその過程や構造・特色を抽出してまとめ、表現させる。
「わかる」ための活動 A	「社会的事象の意味・意義を解釈する」 人間の働き(行為の目的とその意味・意義)を目的・手段・結果の関係を軸に解釈し、共感的に理解する。	社会的事象や問題に、「なぜ、どうして」と問いかけ、その背後にある問題場面での人間(個人・集団・組織体)が行った(行っている)問題解決的行為の過程とその結果を「体験・追体験」させる。
「わかる」ための活動 B	「事象の特色や事象間の関連を説明する」 その背後にある事象間の関係性を見付け、それによって科学的に説明する。	社会的事象や問題に「なぜ、どうして」と問いかけ、その根拠を探り、科学的に説明を行わせる。
「生きる」ための活動	「自分の考えを論述する」 自分なりの意見や考えをもち、それを論理的に表現する。「問題解決」・「意思決定」・「社会形成」	社会的事象の中の問題や課題に、「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」と問い、論述させる。

思考力・判断力・表現力を育成するとは、児童にどのような力を付けていくのかを明らかにした上で、意図的な発問のもと、表 1 のような学習活動を仕組むことが大切なことである。

前項で紹介した単元「わたしたちのくらしとものをつくる仕事ーかきを育てる仕事ー」(以下「かきを育てる仕事」という)の学習指導案を例にしながら、四つの学習活動を学習過程「であう」、「ふかめる」、「いかす」に沿って、具体的に説明をしていく。

「かきを育てる仕事」であれば、広島のかきの生産に興味を持ち、広島のかきの生産量が日本全体の 60% のシェアを誇っている理由を、それに携わる人々の工夫や努力

といった人的な条件（「わかる」ための活動A）と、かきの生産に適した自然条件（「わかる」ための活動B）との2観点から迫る学習になると考えられる。

### (1) 「である」における学習活動

学習過程「である」では、大きく分けて二つの学習活動が想定できる。

- ① グラフや写真，読み物資料などを提示し，読み取ることで，学習内容に興味をもち，疑問や不思議を話し合いながら，単元を貫く学習問題を設定する。
- ② 学習問題に対して予想し，問題を解決するための調べ問題を設定することで，学習計画を立てていく。

#### ① グラフや写真，読み物資料などを提示し，読み取ることで，学習内容に興味をもち，疑問や不思議を話し合いながら，単元を貫く学習問題を設定する

単元「かきを育てる仕事」の導入では，子どもたちは広島で有名なものをたくさん発表していく。そして，次第にかきが話題の中心になるようにしていく。

話題を広島かきに焦点化したところで，広島かきの生産量を表したグラフを提示する。グラフを提示し，グラフから読み取れることを子どもたちが出し合う。この部分は，単元全体を貫く学習問題を立てていくための入り口である。グラフをしっかりと読み取り，班で分かったことや疑問に思ったことをたくさん出せるように，時間を十分に取る必要があるだろう。

話し合うことで，子どもたちは広島のかき生産は有名であることは知っていたが，日本全体の60%のシェアがあることには驚くだろう。そして，それはそのまま「なぜ」，「どうして」という疑問へとつながり，「なぜ，広島のかきの生産量は，日本一なのだろうか。」という単元全体を貫く学習問題を立てることができるだろう。

#### ② 学習問題に対して予想し，問題を解決するための調べ問題を設定することで，学習計画を立てていく

単元を貫く学習問題を設定すると，次はその問題を解決するための学習計画を立てていく。何を調べれば，その問いが解決できるか，それを考えていくのがここでの学習活動になる。

学習計画を考えるときに手掛かりとなるのは，単元全体を貫く学習問題に対する予想である。「なぜ，広島のかきの生産量は，日本一なのだろうか。」という問いに対して，子どもたちは，「広島の世界にはかきのえさがたくさんあるのではないか」，「昔からかきの養殖をしていて広島にしかない技術があるのではないか」，「波が穏やかだから養殖には適しているのではないか」など，たくさんの予想をしていくはずである。時間を十分に確保し，小集団で考えを出し合う。そして，小集団で出し合ったことを，一斉に出し合い，整理していくことで，何を調べればよいかが見えてくるはずである。それをまとめたものが次のページの表2である。

表 2 児童の予想とその調べ問題の例

予想例	調べ問題
よいえさがあるから	かきのえさは何か。 かきが好むえさが養殖場の近くにあるのか。
養殖業者がかき生産に優れているから	かきはどのように養殖されているのか。 特別な工夫があるのではないか。
以下（略）	

上の表のように予想を出し、予想を確かめるためにはどうすればよいかを考えるようにする。そうすると、何を調べていけばよいのかが明らかになるであろう。

単元を貫く学習問題を常に意識しながら、子どもたち自身が予想を出し合い、学習計画を立てていく。そうすることで、「何を何のために調べているのか」、「何を考えるために調べているのか」が明確になり、学習意欲をもって学習に取り組むことができるであろう。

## (2) 「ふかめる」における学習活動

学習過程「ふかめる」では、大きく分けて二つの学習活動が想定できる。

- ① 学習計画に沿って調べ活動を行っていく。
- ② 調べたことから考えて表現し、学習問題に迫る。

単元全体を貫く学習問題は、「なぜ、広島のかきの生産量は、日本一なのだろうか？」である。学習過程「ふかめる」では、その学習問題を調べ問題に沿って調べていく学習活動、そして、調べたこと・考えたことをまとめたり、表現したりする学習活動をしながら、単元を貫く学習問題を解決していくことになる。

### ① 学習計画に沿って調べ活動を行っていく

#### 【知るための学習活動】

学習問題を解決するための入り口として、かきの生態やかきが養殖でつくり育てられていること、かき養殖の方法などを知るための学習活動を行う。これは小原顧問が示す表1の「知る」ための学習活動に位置付く。

ここでは、かきの生態が分かる資料、かきが養殖によってつくり育てられている写真や資料などを基に、子どもたちがかきやかき養殖についての基礎的な理解を図るための活動をする。単元「かきを育てる仕事」では、第4時、第5時にあたる。

#### 【「わかる」ための活動A】

「わかる」ための活動Aは、携わる人々の工夫や努力といった人的な条件から学習問題に迫る活動である。

かき養殖技術の変遷やかき養殖の歴史が分かる資料、かき養殖業者の工夫や努力が分かる資料などを基にして、子どもたちがかき養殖に携わる人々がどのようにして、国内シェア60%を達成しているのか追究する活動である。単元「かきを育てる仕事」では、第7時、第8時にあたる。

## 【「わかる」ための活動B】

「わかる」ための活動Bは、かきの生産に適した自然条件といった観点から学習問題に迫る活動である。

広島の平均気温やかきが成育しやすい条件をグラフや読み物資料などで提示し、子どもたちが読み取っていく。そうすることで、広島湾は、かきの養殖がしやすい自然条件が整っていることをつかんでいく活動が考えられる。単元「かきを育てる仕事」では、第6時にあたる。

### ② 調べたことから考えて表現し、学習問題に迫る

ここでは、これまでの学習で調べたことを基に、単元全体を貫く学習問題を解決する学習活動を行う。

単元「かきを育てる仕事」では、調べ問題を基に、かきの生態やかき養殖の歴史、かき養殖に適した広島湾の自然条件やかき養殖に携わる人々の工夫や努力などを調べている。学習問題「なぜ、広島のかきの生産量は、日本一なのだろうか。」を提示し、子どもたちが調べてきたことを小集団で確認していく。ただ確認するだけでは事実の確認で終わってしまう。

ここで重要なことは、単元全体を貫く学習問題と今まで調べてきたことを結び付けていくことである。広島湾でかきの養殖が盛んなのは、地形や気候などの自然条件、そして、携わる人々の工夫や努力、その人々の思いや願いなどいろいろなことが、つながり合っているからである。

子どもたちは調べてきたことを小集団で確認し合いながら、単元全体を貫く学習問題を解決するために、いろいろな事象を結び付けていく。そして、学習問題「なぜ、広島のかきの生産量は、日本一なのだろうか。」を解決していく中で、広島湾でかき養殖が盛んな理由に気付けるようにする。小集団で話し合う時間をしっかり取り、それを基に、学級全体で話し合い活動を行うことで思いや考えを出し合う。それによって、広島湾でかき養殖が盛んな理由を深めることができ、“盛んになるためには…”という社会的なものの見方・考え方を身に付けることができるであろう。

### (3) 「いかす」における学習活動

学習過程「いかす」で行うべきことは三つの活動に分けることができる。

- ① 社会問題に対して、その解決策を考え、表現する活動
- ② 新たな問題や他の学習へ発展していく活動
- ③ 学習を振り返りながら、総合的に判断する活動

学習過程「いかす」では、「ふかめる」で学習した知識や社会的なものの見方・考え方をを用いて、新たな問題を解決し、何らかの形で子どもの考えを論述する。

#### ① 社会問題に対して、その解決策を考え、表現する活動

かき養殖業者の思いや願いを考えることで、かき養殖に携わる人たちがめざすべき社会の在り方について考えたり、問題を解決するための対策を挙げたりする活動がこの活動にあたる。

東北大震災で壊滅的な被害を東北地方は受けた。そして様々な復興支援がなされる中で、広島のかき養殖業者が、宮城県のかき養殖業者の再建を支援していた。「ライバルであるはずの宮城県の養殖業者をなぜ広島のかき養殖業者の人々は支援しにいったのだろうか」という問いを立て、再建支援をした広島のかき養殖業者の思いや願いに触れていく。東北の復興という社会的な問題に対して、広島のかき養殖業者ができる復興支援に気付けるような学習が想定できる。

## ② 新たな問題や他の学習へ発展していく活動

学習過程「ふかめる」までに学習した事例を別事例に当てはめて説明することで、単元で学習する知識や社会的なものの見方・考え方を確かなものにするための学習活動である。

単元「かきを育てる仕事」の学習過程「ふかめる」では、「なぜ、広島のかきの生産量は、日本一なのだろうか。」という問いを解決していくことで、広島湾でかき養殖が盛んな理由に気付き、“盛んになるためには…”という社会的なものの見方・考え方を身に付けていると考えられる。

それを、新たな問題や他の学習へ発展していく活動として想定されることは、川内の広島菜づくり、オタフクのソースづくりなど、他の事例に当てはめながら、同じ社会的なものの見方・考え方でその事象を読み解き、説明していく学習となる。

## ③ 学習を振り返りながら、総合的に判断する活動

自然の恵をより豊かにするために、海で働く養殖業者が山に入り植林をしている。山を豊かにすることで、より栄養の含まれた水が川に流れ込み、海が豊かになる。栄養の豊かな海で育ったかきは当然品質が向上する。「なぜかきの養殖業者が山の中で植林をしているのか」という問いを立て、これからも広島のかき養殖を進化発展させていくためにはどうしたらよいかを子どもたちが考えていく学習となる。

ここまで、前項で提示された学習指導案に即した形で、学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力を付けるための学習活動をどう組織するかについて述べてきた。暗記中心の学習活動になっていたり、問題解決への見通しを子ども自身がつかみにくくなっていたりするような課題を克服する学習活動とは何かについて述べてきた。社会を読み解く力を育成する学習活動を地道に積み重ねることで、児童の学習意欲は向上していくことと確信している。

## 4 学習評価

### (1) 学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力を育成する学習評価

#### ① 評価することの意味 —指導と評価の一体化—

評価のための評価であってはならない。評価は子どもの成績を付けるものと思われがちである。それは評価の一部の意味であって、全てではない。

「広島の社会科」では、評価の目的を主に次の2点と考える。

1点目は、目標を達成することができたかどうかを図るための評価である。授業は子どもに確かな学力を付けていくためになされるものであり、評価はその力を子どもに付けることができたかどうかを子どもの様子から見取るものである。

2点目は、授業改善の手掛かりとするための評価である。本時の目標を達成することができていたなら、なぜ到達することができたのか、逆に達成できなかったなら、なぜ到達できなかったのかを分析する。子どもの評価を通して自らの授業に対する評価を行い、次時の授業改善を図っていく。一般的には指導と評価の一体化と言われるように、子どもの評価のためだけに評価をするのではなく、評価を授業改善の手掛かりとし、授業力を向上するために活用するのである。

#### ② 「広島の社会科」の評価に対する考え方

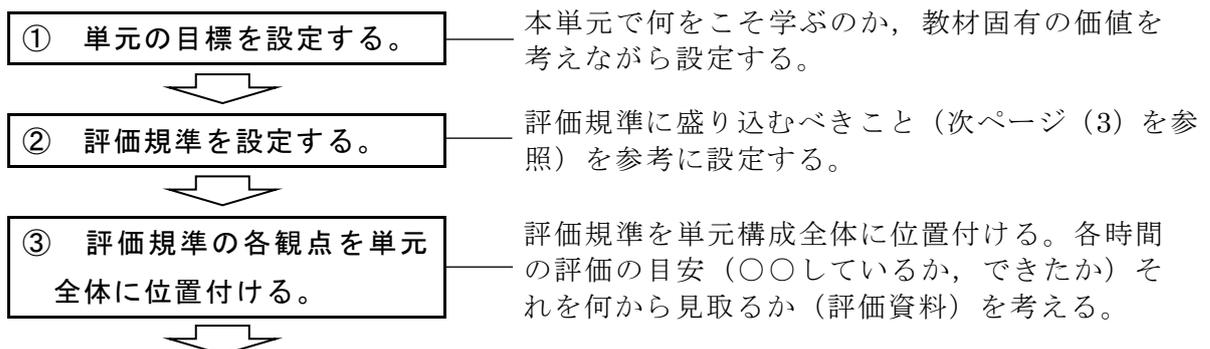
評価では、評価規準で示すつきたい力を子どもが習得できたかどうかを「判断基準（評価基準）」に従って判断する。一般に、「十分に満足できる状態」(A)、「おおむね満足できる状態」(B)、「努力を要する状態」(C)と3段階でされる場合が多い。しかし「広島の社会科」では、判断基準を一つに絞る。

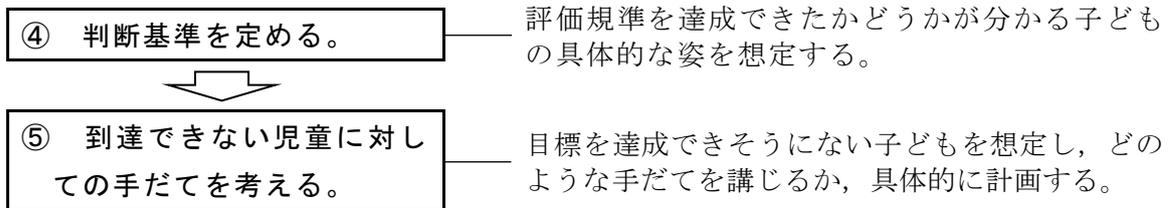
教師には、「何をこそ教えるのか」を明確にして本時の目標を立て、それを子ども全員が達成できるように授業を行う責任がある。「広島の社会科」では、教師の使命を大事にし、また子ども全員に確かな学力を付けていくことをめざしている。

子どもたちに確かな学力を付けるためには、教師が設定した目標を達成できたかどうかで見取らなければならない。どこまで到達できたかというA・B・Cの3段階ではない。教師が意図する目標に達成できたかどうか、それはすなわち子どもに力が付いたかどうかであり、それが授業の本質だからである。

### (2) 評価の進め方や手順

子どもに確かな思考力・判断力・表現力を育成し、学習意欲を向上させるための評価の進め方や手順は以下の通りである。





### (3) 評価基準の設定（評価基準に盛り込むべきこと）

社会科の評価の観点とその趣旨は下のよう示されている。

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
社会的事象に関心をもち、それを意欲的に調べ、社会の一員として自覚をもってよりよい社会を考えようとする。	社会的事象から学習問題を見いだして追究し、社会的事象の意味について思考・判断したことを適切に表現している。	社会的事象を的確に観察、調査したり、各種の資料を効果的に活用したりして、必要な情報をまとめている。	社会的事象の様子や働き、特色及び相互の関連を具体的に理解している。

上記の観点の趣旨を踏まえ、さらに、「評価基準のための参考資料」に掲載されている各学年の「評価の観点の趣旨」、各内容の「評価基準に盛り込むべき内容」、「評価基準の設定例」を参考にすることで、具体的な評価基準を設定することができる。

「評価基準の設定例」に記述されている例文は次のようなパターンが用いられているので、実際に評価基準を設定する際に参考にされたい。

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
① ～に関心をもち、意欲的に調べている。 ② ～を考えようとしている。 ～に協力しようとしている。 ～を活用しようとしている。	① 学習問題や予想、学習計画を考え、表現している。 ② ～を（関連付けたり、比較したり、総合したりして）考え、適切に表現している。	① ～について必要な情報を集め、読み取っている。 ② ～にまとめている。	① ～（調べる対象）を理解している。 ② ～（事象の意味や特色、相互の関連）を理解している。

### (4) 評価の実際 ー単元 第4学年「くらしをささえるごみのしより」を例にー

ここでは、単元第4学年「くらしをささえるごみしより」を例に、単元の目標、単元の評価基準を示す。また、具体的な評価例として、学習過程「であう」の2時間目の授業を簡単に紹介し、本時の目標と評価基準・判断基準・手だて、子どものノートの記述をどのように見取っていくのかという評価の実際を紹介する。

#### ① 単元の目標

- 廃棄物の処理が、自分たちの生活や産業と深く関わっていることやそれらが計画的・協力的に進められていることを理解し、地域の環境保全に対する関心をもったり、廃棄物の適切な処理や再利用などに協力しようとしたりする。
- 廃棄物の処理について見学、調査したり、資料を活用したりして調べ、その対

策や事業は地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを考えるようにする。

## ② 単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
① ごみ処理について関心をもち、意欲的に調べたり、考えたりしようとしている。 ② 地域社会の一員として、ごみの減量や資源の再利用などの取組に協力しようとしている。	① ごみ処理にかかわる対策や事業について、学習問題や予想、学習計画を考え表現している。 ② ごみの処理に対する対策や事業が地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを自分たちの生活と関連付けて考え、適切に表現している。	① 施設・設備などの観点に基づいて見学・聞き取り調査を行ったり、統計やパンフレットなどの資料を活用したりして、ごみの処理にかかわる対策や事業について必要な情報を集め、読み取っている。 ② 調べたことをノートにまとめている。	① きまりに基づきごみ処理が進められていることや生活や産業とかかわっていることを理解している。 ② ごみ処理に関わる対策や事業は計画的、協力的に進められていること、またそれと地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解している。

## ③ 本時の展開 ー学習過程「であう」の2時間目ー

「広島市の人口の変化」と「広島市のごみの量の変化」が分かるグラフを用意する。人口は年々増加していること、ごみの量は年々減少していることがグラフから読み取れる。「人口が増えたのならごみも増えるはず」というのが子どもの素朴な考えであろう。しかし、「人口は増えたのにごみの量は年々減っている」のである。自分の考えとは矛盾する事実から思いや考えをもてるようにする。

## ④ 評価の実際

### ア 本時の目標と評価規準・判断基準・手だて

ここでは本時の目標を【関心・意欲・態度】とした場合と【思考・判断・表現】にした場合とに分け、それぞれの目標と評価規準・判断基準・手だてを示す。

	【関心・意欲・態度①】	【思考・判断・表現①】
本時の目標	「広島市の人口の変化」と「広島市のごみの量の変化」の二つのグラフを読み取り、ごみ処理や広島市のごみの量の変化に関心をもつ。	「広島市の人口の変化」と「広島市のごみの量の変化」の二つのグラフから読み取った情報をもとに、学習問題につながる疑問をもつことができる。
評価規準	グラフから分かったことをもとに、思いや考えをもつことができる。	二つのグラフを読み取り矛盾に気付く、学習問題につながる思いや考えをもつことができる。
判断基準	人口が増えているのにごみの量が減っていることに対して、自分なりの思いや考えをもっているか。[ノート・発言]	二つのグラフから気付く矛盾に対して、その原因や理由について自分なりの思いや考えをもっているか。[ノート・発言]
手だて	人口は増えるとごみの量はどうなると思うかと問い、グラフの矛盾に気付けるようにする。	矛盾が起きるのはなぜだと思うかと問い、原因や理由に目が向けられるようにする。

## イ 見取りと評価

A児とB児のノートへの記述を例に示す。その記述を【関心・意欲・態度】の場合と【思考・判断・表現】の場合とに分けて具体的に分析・評価する。

### A児のノートへの記述

15 〇 所島市のごみの量の变化は上が  
 て下がっています。  
 〇 人口の变化は、どんどんふえて  
 10 いらっています。  
 <思、たこと考えたこと>  
 〇 人口がふえるとごみがふえると  
 わたしは思、たけどごみは、へ  
 っているので、ふしぎだ。  
 ↳なぜだと思、すか？

### A児のノートへの記述を【関心・意欲・態度】として見取る場合

A児は、「人口が増えるとごみも増える」という自分の思いとは裏腹に、「ごみは（年々）減っている」という事実をグラフから読み取り、それを「ふしぎ」だと思っている。自分の常識とは異なった社会の様子に関心をもっていることが分かる。A児は本時の目標を達成していると考えられる。

### A児のノートへの記述を【思考・判断・表現】として見取る場合

「ごみの量の变化は上がって下がっている」・「人口はどんどん増えている」とグラフから読み取りその二つをつなぎ合わせることで、また自分の「人口が増えるとごみも増える」という思いと対比することで、「人口が増えるのにごみの量は減る」という矛盾に気付く。しかし「ふしぎだ」という感想に留まっている。A児は本時の目標を達成できなかったと考えられる。

### B児のノートへの記述

<グラフから分かること>  
 わたしは、ごみの量の变化は2008  
 10 年度が一番少ないのに人口は2008  
 年度が一番多いことが分かりまし  
 た。  
 <思、たこと考えたこと>  
 わたしが人口がふえてもごみがふ  
 えなないと考えた理由は、②年度が進  
 むごとにごみを減らすことが考え  
 られているのかと思、ました。

### B児のノートへの記述を【関心・意欲・態度】として見取る場合

「人口が増えてもごみが増えない」ということにグラフを読み取ることで気付いている。B児もA児と同じように、「人口が増えればごみの量も増える」と考えていたのだろう。A児はそれが「ふしぎ」に留まっていたが、B児はその理由を自分なりに考え「年度が進むごとにごみを減らすことが考えられている」と思いをつづっている。B児も本時の目標を達成していると考えられる。

### B児のノートへの記述を【思考・判断・表現】として見取る場合

「ごみの量の变化は」と記述しているので変化に目を向け「2008年が一番少ない」ことを読み取っている。「人口は2008年が一番多い」と記述している。A児と同じように、矛盾に気付いている。A児はそれが「ふしぎ」という感想に留まっている

が、B児はそれに留まらず、「年度が進むごとにごみを減らすことが考えられている」と記述している。具体的には書かれていないが、制度の改革や人々の工夫や努力によってごみを減らす取り組みがなされたのではないかということを書いている。B児は本時の目標を達成していると考えられる。

## ⑤ 授業改善に向けて

### ○ A児とB児の「思ったこと・考えたこと」に学ぶ

A児もB児も二つの資料から情報を取り出し、その矛盾に気付くことができている。そしてA児は「ふしぎ」という思いを、B児は「ごみを減らす取組がなされているのではないか」という疑問に発展する思いや考えをもつことができている。

そのような思いは「どのようにしてごみの量を減らしているのか」・「なぜごみの量を減らしていかなければならないのか」などの学習問題へと発展していくだろう。つまり、社会のいろいろな取組を知ったり（「社会を知る」）、意味を分かったり（「社会がわかる」）する後の学習へも意欲をもって取り組むことへとつながっていくと考える。

学習の導入段階では、どのような事実を、どのような資料を使い、どのように提示して学んでいくのかは単元全体に関わる大事なことでありと学ぶことができる。

### ○ 【思考・判断・表現】の目標を達成できなかったA児から学ぶ

「人口が増えるとごみが増える」そこに比例関係が成り立つことは納得できる。しかし実際は異なり、ごみの量は減っている。A児のノートに教師が下線で「なぜだと思いませんか？」と指摘して更なる考えを引き出そうとしている。それを本時の中でできたらよかったのだろう。そうすれば、A児はさらに考えを深め、例えば「スーパーマーケットにリサイクル品の回収ボックスが設置されていること」や「子ども会で廃品回収をした経験」など直接的にごみを減らしていくような取組に気付いたり、「分別収集していることが関係あるかもしれない」、「ごみを減らすために市が工夫しているのかも」など考えたりするだろう。子どもに何をどのように考えてほしいのかを具体的に想定すること、話合いの様子やノートへの記述を授業の中でしっかりと見取り、目標を達成するための手だてを講じていくことが必要である。

## (5) 成績と評価について 評価を記録として書き残す場合

通知表や指導要録などを作成するとき、子どものノートや成果物などから行った評価を活用する。「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」には、「評価した結果を記録に残す場合では、「十分満足できる」状況（A）、「おおむね満足できる」状況（B）、「努力を要する」状況（C）の3段階で評価する」と示されている。「広島県社会科」では判断基準を一つに絞っていることからそれを（B）と考え、（B）を超えるものを（A）とし、（B）に到達しないものは（C）と評価することになるだろう。

### <引用・参考文献>

- 北尾倫彦監修他『観点別学習状況の評価規準と判定基準 [小学校社会]』, 図書文化社, 2011年
- 国立教育政策研究所教育課程センター『評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校社会科】』, 平成23年

## IV 研究の進め方

### 1 授業づくりの方法

#### (1) 素材を教材化する

素材を教材化するに当たって、まず、『小学校学習指導要領解説 社会編』を読むことから始めたい。本解説には、教科の目標、各学年の目標と内容等が示されており、これらは、素材を教材化する際の根拠となるものである。

本解説に基づき、「なぜ、この学習内容を取り上げるのか」、「どのような事象を扱うのか」、「どのような学習をさせるのか」、「この学習内容から何を考えさせるのか」などについて検討することで、教えるべきことが明確になってくる。

身の回りにある事象を教材化することについては、「Ⅲ 研究の視点」に先述した通りである。

#### (2) 「教材・内容の構成」から「問いの構成」を作成する

「問いの構成」を作成するに当たって、まず、教材化したものを通して、「学ばせたいことは何か」、「どのような力を付けるのか」という目標と内容を明確にすることが大切である。このことは、目標を達成させるために、どのような内容をどのような順序で学習させるのかを構成することにつながる。

教材を構造的にとらえる必要があることは、「Ⅲ 研究の視点」で先述した。構造的にとらえたものから、問いを構成するようにしたい。問いを構成することにより、単元の中心発問や1単位時間ごとの目標を計画することが容易になると考える。

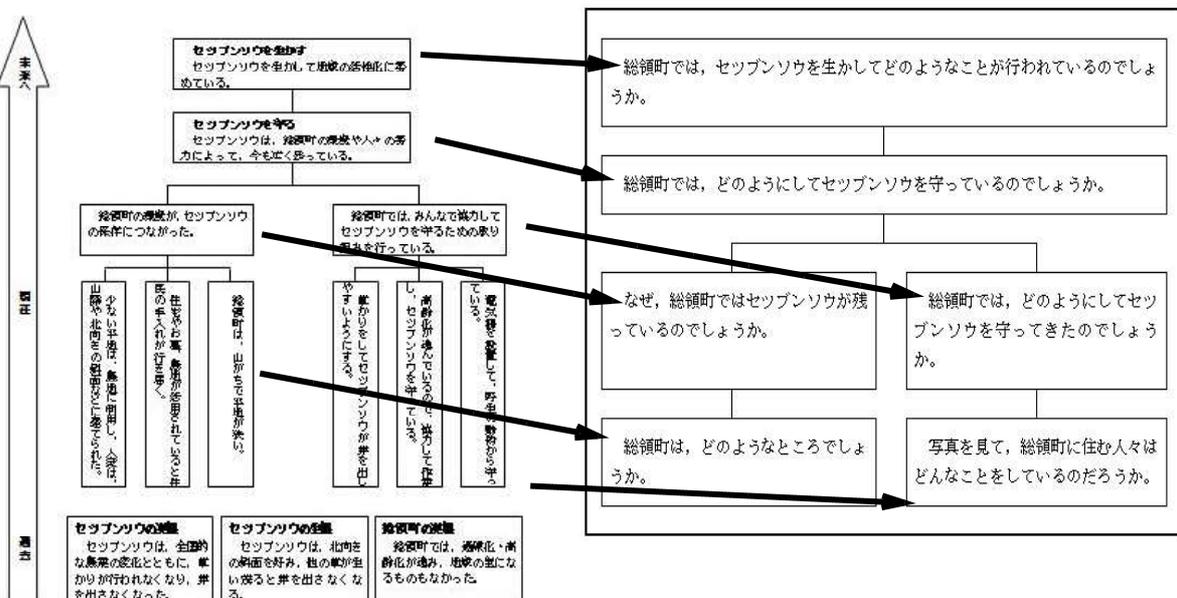


図1 「教材の内容の構成」と「問いの構成」

まず、「教材・内容の構成」の下段にある部分を問いに置き換える際の基本的な考え方を示す。子どもが社会的事象と出会い、社会で起こっていることを読み取るためには、資

料から必要な情報を読み取ったり、資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえたりすることが大切である。このような授業を展開する際、「なぜ～だろうか」、「どのように～しているのだろうか」という問いにすることが考えられる。

次に、「教材・内容の構成」の中段から上段にある部分を問いに置き換える際の基本的な考え方を示す。主に、次の二つが考えられる。一つ目は、ある社会的事象に対して、事象の特色や構造を表現することができるように、「どのように～しているのだろうか」、「どのような～になっているのだろうか」という問いにすることである。二つ目は、目的と手段、原因と結果の関係を表現することができるように、「なぜ、～するのだろうか」、「どうして～のようになるのだろうか」という問いにすることである。

最後に、社会に内在する問題を解決する学習場面の問いについて基本的な考え方を示す。このような学習場面では、合理的な手段や方法を判断させることが大切である。そこで、社会の問題に対してどのようにしたらよいか対策を考えたり、どの解決策が望ましいか見極めたりすることができるように、「どのように～したらよいのだろうか」、「どの解決策がより望ましいのだろうか」という問いにすることが考えられる。

### (3) 学習指導計画を作成する

「教材の構成」から「問いの構成」を考え、単元の構想を練った後は、1単位時間ごとの目標と内容を考え、順序を検討して学習指導計画を立てていくことになる。

<p>総領町では、セツブンソウを生かしてどのようなことが行われているのでしょうか。</p> <p>総領町では、どのようにしてセツブンソウを守っているのでしょうか。</p> <p>なぜ、総領町ではセツブンソウが残っているのでしょうか。</p> <p>総領町では、どのようにしてセツブンソウを守ってきたのでしょうか。</p> <p>総領町では、どのようなところでしょうか。</p> <p>写真を見て、総領町に住む人々はどんなことをしているのだろうか。</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>過程</th> <th>ねらい</th> <th>主な学習活動と内容</th> <th>■教師のはたらきかけ口評価 ☆資料</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>社会認識を育てる場</td> <td>総領町のセツブンソウについて調べる意欲をもち、学習の見通しをもつ。</td> <td>写真や文章の記述からセツブンソウの概要をつかむ。</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>セツブンソウが多く見られなくなった花であることをつかんでおくようにする。</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td>ふ</td> <td>総領町の自然環境とセツブンソウを関連付けて考え表現できるようにする。</td> <td>写真から総領町の自然環境の様子を読み取る。セツブンソウに必要な環境と総領町の環境を照らし合わせて考え、話し合う。</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>なぜ総領町にはセツブンソウが広く残っているのでしょうか。</li> <li>学習問題を立て、社会条件や自然条件をもとに自分の考えを述べているか。【思図：発言・記述】</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td>実践的な力を育てる場</td> <td>総領町の人々がセツブンソウを宝として、地域の活性化に役立っていることを理解できるようにする。</td> <td>写真からセツブンソウの自生地公開や節分草祭りの様子を読み取り、総領町の人々がどのような思いをもっているか考え、話し合う。他の取組を調べ、地域の人の町への思いを考え、話し合う。</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>副読本 p.181 「スキルアップ『写真を読み取る』」を参考に写真の読み取りを行うようにする。</li> <li>自然環境と生活、セツブンソウの生態を関連付けて考え、表現しているか。【思図：発言・記述】</li> <li>総領町でも自生地がなくなる可能性があったことを人口の変化のグラフからつかんでおくようにする。</li> <li>セツブンソウを守る取組や人々の思いを読み取っているか。【挟図：発言・記述】</li> <li>役場の方の話やボランティアの写真などから、世代を超えて町全体で大切にしていることを理解できるようにする。</li> <li>総領町の人々がセツブンソウを大切に、地域の活性化を願っていることを理解しているか。【知図：発言・記述】</li> </ul> </td> </tr> </tbody> </table>	過程	ねらい	主な学習活動と内容	■教師のはたらきかけ口評価 ☆資料	社会認識を育てる場	総領町のセツブンソウについて調べる意欲をもち、学習の見通しをもつ。	写真や文章の記述からセツブンソウの概要をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>セツブンソウが多く見られなくなった花であることをつかんでおくようにする。</li> </ul>	ふ	総領町の自然環境とセツブンソウを関連付けて考え表現できるようにする。	写真から総領町の自然環境の様子を読み取る。セツブンソウに必要な環境と総領町の環境を照らし合わせて考え、話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>なぜ総領町にはセツブンソウが広く残っているのでしょうか。</li> <li>学習問題を立て、社会条件や自然条件をもとに自分の考えを述べているか。【思図：発言・記述】</li> </ul>	実践的な力を育てる場	総領町の人々がセツブンソウを宝として、地域の活性化に役立っていることを理解できるようにする。	写真からセツブンソウの自生地公開や節分草祭りの様子を読み取り、総領町の人々がどのような思いをもっているか考え、話し合う。他の取組を調べ、地域の人の町への思いを考え、話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>副読本 p.181 「スキルアップ『写真を読み取る』」を参考に写真の読み取りを行うようにする。</li> <li>自然環境と生活、セツブンソウの生態を関連付けて考え、表現しているか。【思図：発言・記述】</li> <li>総領町でも自生地がなくなる可能性があったことを人口の変化のグラフからつかんでおくようにする。</li> <li>セツブンソウを守る取組や人々の思いを読み取っているか。【挟図：発言・記述】</li> <li>役場の方の話やボランティアの写真などから、世代を超えて町全体で大切にしていることを理解できるようにする。</li> <li>総領町の人々がセツブンソウを大切に、地域の活性化を願っていることを理解しているか。【知図：発言・記述】</li> </ul>
過程	ねらい	主な学習活動と内容	■教師のはたらきかけ口評価 ☆資料														
社会認識を育てる場	総領町のセツブンソウについて調べる意欲をもち、学習の見通しをもつ。	写真や文章の記述からセツブンソウの概要をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>セツブンソウが多く見られなくなった花であることをつかんでおくようにする。</li> </ul>														
ふ	総領町の自然環境とセツブンソウを関連付けて考え表現できるようにする。	写真から総領町の自然環境の様子を読み取る。セツブンソウに必要な環境と総領町の環境を照らし合わせて考え、話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>なぜ総領町にはセツブンソウが広く残っているのでしょうか。</li> <li>学習問題を立て、社会条件や自然条件をもとに自分の考えを述べているか。【思図：発言・記述】</li> </ul>														
実践的な力を育てる場	総領町の人々がセツブンソウを宝として、地域の活性化に役立っていることを理解できるようにする。	写真からセツブンソウの自生地公開や節分草祭りの様子を読み取り、総領町の人々がどのような思いをもっているか考え、話し合う。他の取組を調べ、地域の人の町への思いを考え、話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>副読本 p.181 「スキルアップ『写真を読み取る』」を参考に写真の読み取りを行うようにする。</li> <li>自然環境と生活、セツブンソウの生態を関連付けて考え、表現しているか。【思図：発言・記述】</li> <li>総領町でも自生地がなくなる可能性があったことを人口の変化のグラフからつかんでおくようにする。</li> <li>セツブンソウを守る取組や人々の思いを読み取っているか。【挟図：発言・記述】</li> <li>役場の方の話やボランティアの写真などから、世代を超えて町全体で大切にしていることを理解できるようにする。</li> <li>総領町の人々がセツブンソウを大切に、地域の活性化を願っていることを理解しているか。【知図：発言・記述】</li> </ul>														

図2 「問いの構成」と「学習指導計画」

「問いの構成」から、学習指導計画を作成する際の基本的な整理の仕方と手順を示す。まず、「教材・内容の構成」あるいは「問いの構成」の下段にある部分は、主に、「であ

う」過程に当てる。

次に、「教材・内容の構成」あるいは「問いの構成」の中段から上段にある部分は、主に、「ふかめる」過程に当てる。

最後に、社会に内在する問題の解決ために合理的な手段・方法を判断できるようにする場面での問いは、「いかす」の過程に当てる。

学習指導案の形式と留意点については、次項で述べることとする。



7 学習指導計画（全13時間・本時9/13）

過程	ねらい	主な学習活動と内容	■教師の働きかけ □評価 ☆資料
社会認識を育てる場 であう	・・・・ ・・・・に 心をもつこと ができる。 学習活動が もつ意味を記 述する	① ・・・・ ・・・・する。 （学習活動を記述する） 学習活動①での学習問題を記述する。 ・（学習内容を記述する）	■ ・・・・することによって、 ・・・・ができるようにする。 （教師の支援の立場に立った表現をする） □ 関①：授業後の感想 ↑ 単元の評価，規準番号 評価方法 評価に関しては，本時のねらいと関連付けて，評価規準番号と評価方法を学習活動ごとに記述する。 ☆ ・・・・（資料を記述する。）
	既習事項と関連づけたい学習問題に対する考えを考察する。	② 広島のかきの生産量が日本一であることから，学習問題をつくり，学習問題に対する予想を考察する。 なぜ，広島のかきの生産量は日本一なのだろうか。 ↑ 二重線で単元を貫く学習問題を記述する。	■ 複数の学習問題が出てきた場合は，これまでの学習の関連性やより世の中のことが分かるものを問いかけることによって，学習する価値の高い学習問題を絞っていくことができるようにする。 □ 思①：ワークシート ☆ 都道府県別かきの生産量
	学習問題を解決していくための適切な学習計画を立てることができる。	③ 前時に考えた予想について協議しながら，何をどのように調べていけば学習問題を解決していくことができるか話し合う。 広島のかきの生産量が日本一の理由を調べていくための計画を立てよう。 ・ かきの生態について，図書室で調べる。	■ 予想を分類して掲示することで調べていくことを整理できるようにする。

ふかめる	かきの生態や、かきの並んで飼育していること。	④ かきについて知っていることを発したり、かきクイズをしたりしながら、かきの生態を調べる。	
		<p>かきって、どのような生き物なのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>かきの餌はプランクトンである。</li> <li>かきは産卵後2週間程度で海水中の固着物に付着し、一生そこから離れない。</li> <li>かきはいかだで養殖されている。</li> </ul>	<p>■ クイズ形式にすることで、興味・関心を高めながら学習できるようにする。</p> <p>□ 知①：小テスト</p>

実践的な力を育てる場	いかす	かき養殖業者の抱える問題点に基づいていくことで、それに携わる人々の願いを導き出すことができる。〈本時〉	⑨ 既習事項を想起しながら、かき養殖業者の願いを予想し、協議していく。	
			<p>かきの養殖をされている方々は、どのような願いをもっているのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生産量を増やしていきたいと願っている。</li> <li>品質のよいかきをつくって高く売れることを願っている。</li> <li>かきの中身を取り出す作業を楽にしたいと願っている。</li> </ul>	<p>■ 前時の学習したかき業者の抱える問題点を掲示することで、かき養殖業者の願いを導き出すことができるようにする。</p> <p>□ 思②：ふり返りカード</p> <p>☆ かき養殖業者の抱える問題点</p>
		かき養殖業者の願いを実現していくための問題点がある。	⑩ 既習事項を想起しながら、かき養殖業者の願いが実現していくための問題点を話し合う。	
			<p>かきの養殖をされている方々の願いを実現していくためには、どのような問題点があるのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>かきが嫌いな人もいる。</li> <li>赤潮が出ると育てたかきが死んでしまう。</li> <li>かきの中身を取り出すことを機械でできるようにするにはコストがかかる。</li> <li>中国山地の森林が</li> </ul>	<p>■ ノートを見返すことでこれまでの既習事項を活かしながら、問題点を導き出すことができるようにする。</p> <p>□ 思②：ワークシート</p> <p>☆ かき養殖業者の抱える問題点</p>

### 8 本時の目標と評価方法

かき養殖業者の抱える問題点に基づいて考えていくことで、それに携わる人々の願いを導き出すことができる。[思②：ふり返りカード]

## 9 本時の学習展開

学習活動・内容	■教師の働きかけ ☆資料・準備物
<p>1 前時の感想を発表しながら本時の学習問題をつくる</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">具体的な学習活動を記述する。</p>	<p>■ ……することによって、……ができるようにする。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">※ 教師の手だてによって、子どもに何をできるようにしたいのかという文章形式で記述する。</p>
<p>かきの養殖をされている方々は、どのような願いをもっているのだろうか。  <b>&lt;本時の学習問題を罫線で囲みで記述する&gt;</b></p>	
<p>2 学習問題に対する予想を考え、ノートに記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 赤潮やかきのえさが減ってきたことで生産量が減少している。</li> <li>・ かきの人気下がってきて、かきの値段も下がってきている。</li> </ul> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">学習活動で獲得できる学習内容を記述する。</p>	<p>■ 前時の学習したかき業者の抱える問題点を提示することで、かき養殖業者の願いを予想することができるようにする。</p> <p>☆ かき養殖業者の抱える問題点</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">※ 資料や準備物などについては、どのように活用するのか、指導上の留意点として記述する。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">※ 配慮が必要な児童への手だてが必要な場ではその手だても記述する。</p>
<p>3 予想を小グループで交流した後、全体で意見を協議していく。</p>	<p>■ 小グループで交流することで、予想を考えることができなかった児童も、考えることができるようにする。</p> <p>■ かき養殖業者の抱える問題点と子どもたちの予想を比較しながら考えることで、かき養殖業者の願いを導き出せるようにする。</p>
<p>4 学習問題を確認しながら本時の学習で分かったことをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生産量を増やしていきたいと願っている。</li> <li>・ 品質のよいかきをつかって高く売れることを願っている。</li> <li>・ かきの中身を取り出す作業を楽にしたいと願っている。</li> </ul>	<p>■ 学習のまとめを子どもの言葉でうまくまとめることができない場合は、本時のまとめを穴埋め問題で提示することで、適切なまとめができるようにする。</p>
<p>5 授業後の感想をふり返りカードに書く。</p>	<p>■ 本時の学習内容が理解できているかどうか判定できるように配付したふり返りカードに感想を書くようにする。</p> <p>☆ ふり返りカード</p>

## 10 授業観察の観点

本時の学習で、かき養殖業者の抱える問題点と子ども達が予想したかき養殖業者の願いを比較しながら考える学習活動を取り入れたことは、それに携わる人々の願いを導き出していく方法として有効な手だてであったか。

研究主題にかかわるものや研究の手引きに示されている内容で、本時で観察してほしい観点を明記する。協議会時には、協議の柱として話し合いを深めていく。

## 11 参考資料（出典）

○筆者・編著者『

』，出版社，0000年

### 3 研究協議会のもち方

#### (1) 事前研究会

事前研究会において、教材を検討する際の観点は、次の二点である。

一点目は、目標・内容と教材との整合性である。この教材が目標を達成するのに適したものか、その内容を扱うのに適しているかを検討する必要がある。

二点目は、教材のおもしろさである。子どもにとって身近なものか、子どもの知的な好奇心を喚起する教材であるか、意外性や感動があるかなどを検討する必要がある。

#### (2) 授業後の研究協議会

##### ① 授業観察の観点

授業者の考えを仮説として、授業を観察する観点を設定し、参観者全員に明示し、共有する。これを研究協議の際の柱にすることによって有意義な協議にすることができるのではないだろうか。

##### ② 授業観察の記録

観察記録にも多種あるが、指導者の発問とそれに対する児童の反応や、児童の作業の様子、板書などを記録（ビデオ、写真、授業記録など）に残すようにする。記録したものを活用し共通の事実のもとで協議を行うことで、授業観察者の印象や主観による授業評価を避け、事実と根拠に基づいた客観的な評価が可能になると考える。

##### ③ 協議会の実際

提案者の仮説をもとに、提案者のねらいが達成できたかどうかを判断していく。現在では、ワークショップや付せん張り出しによる研究協議会が盛んに行われている。議論を活性化させるために必要な方法であろうが、重視したいのは提案者の主張とそれを達成するための手段である。協議会の方法ばかりでなく、協議の目的と協議内容の焦点化を考える必要がある。

#### (3) 事後の研究

##### ① 実践の検証方法

研究の成果を見取る方法として、事前にプレテスト・ポストテストを実施する。パフォーマンス課題や、イメージマップの変容、アンケートなど様々な方法を実施し、あらかじめ設定した評価規準に従って、児童の変容を見取り、数値化したり、分類したりして客観的に成果をみるための尺度にする。

##### ② 改善案の提案

協議会での意見や児童の変容をもとに、よりよい授業にするための改善案を考える。できれば、ブロックで研究会をもち、改善案を検討するようにしたい。授業者に任せることなく、ブロック全体で改善案を提案するというスタンスを大切にしたい。

##### ③ 授業理論の抽出

提案、再検討された授業の優れた点を授業理論として抽出し、他の授業においても適用できるようにしたい。

## 付記1 「生活科」との関連

### (1) 社会科と生活科

教育基本法の改正を受けて、学校教育法において新たに義務教育の目標が規定されるなど、義務教育全体を見通した学習指導の改善が求められている。その中の一つとして、社会科と生活科の関連も挙げられる。

「小学校学習指導要領解説 生活編」では、生活科改訂の要点の中の内容及び内容の取扱いの改善(幼児教育及び他教科との接続)で「生活科の各内容と第3学年以降の社会科、理科の内容を視野に入れ見直しを行った」と述べられている。

「小学校学習指導要領解説 社会編」においても、社会科改訂の趣旨の中の改善の具体的事項で「生活科の学習を踏まえ、児童の発達の段階に応じて、地域社会や我が国の国土、歴史などに対する理解と愛情を深め、社会的な見方や考えを養い、身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る」と述べられている。

#### ① 生活科の教科目標

生活科の教科目標は次のとおりである。

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

この教科目標について、学習指導要領解説(生活編)では、「この教科目標を最も端的に言えば『具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養う』こととなる。その中で、『自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心をもつこと』『自分自身や自分の生活について考えさせること』『生活上必要な習慣や技能を身に付けさせること』が行われるという構成になっている。」と説明されている。

#### ② 教科目標の趣旨

##### ア 具体的な活動や体験を通すこと

「具体的な活動や体験とは、例えば、見る、聞く、触れる、つくる、探す、育てる、遊ぶなどして直接働きかける学習活動であり、また、そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの方法によって表現する学習活動である。」

「直接働きかけるということは、児童が一方向的に身近な人々、社会及び自然に働きかけるだけではない。同時に、それらが児童に働き返してくるという、双方向性のある活動が行われることを意味する。」(小学校学習指導要領解説 生活編より)

##### イ 自分と身近な人々、社会および自然との関わりに関心をもつこと

生活科の学習は、子どもが自分との関わりの中で、身近な人々、社会及び自然に働きかけ、また働き返させるという双方向性のある活動をめぐって展開される。「具体的な活動や体験」の中で、自分と対象との関わりによって得られた「気付き」は、無自覚なものから自覚された「気付き」へ、一つ一つの「気付き」から関連付けられた「気付き」へと高められていくのである。

## ウ 自分自身や自分の生活について考えること

「自分自身や自分の生活について考えるということは、子どもが身近な人々，社会及び自然と直接かかわる中で，自分自身や自分の生活について新たな『気づき』をすることである。児童が，自分自身についてのイメージを深め，自分のよさや可能性に気づき，心身ともに健康でたくましい自己を形成できるようにすることは，自立への基礎を養う上で大切である。」

(小学校学習指導要領解説 生活編より)

## エ 生活上必要な習慣や技能を身に付けること

「生活科は，児童が身近な人々，社会及び自然と直接関わり合う中で，それに必要な習慣や技能を身に付けることを目指している。」

「ここでの生活上必要な習慣には，健康や安全にかかわること，みんなで生活するためのきまりにかかわること，言葉遣いや身体の振る舞いにかかわることなどがある。また，生活上必要な技能には，手や体を使うこと，さまざまな道具を使うことなどがある。」(小学校学習指導要領解説 生活編より)

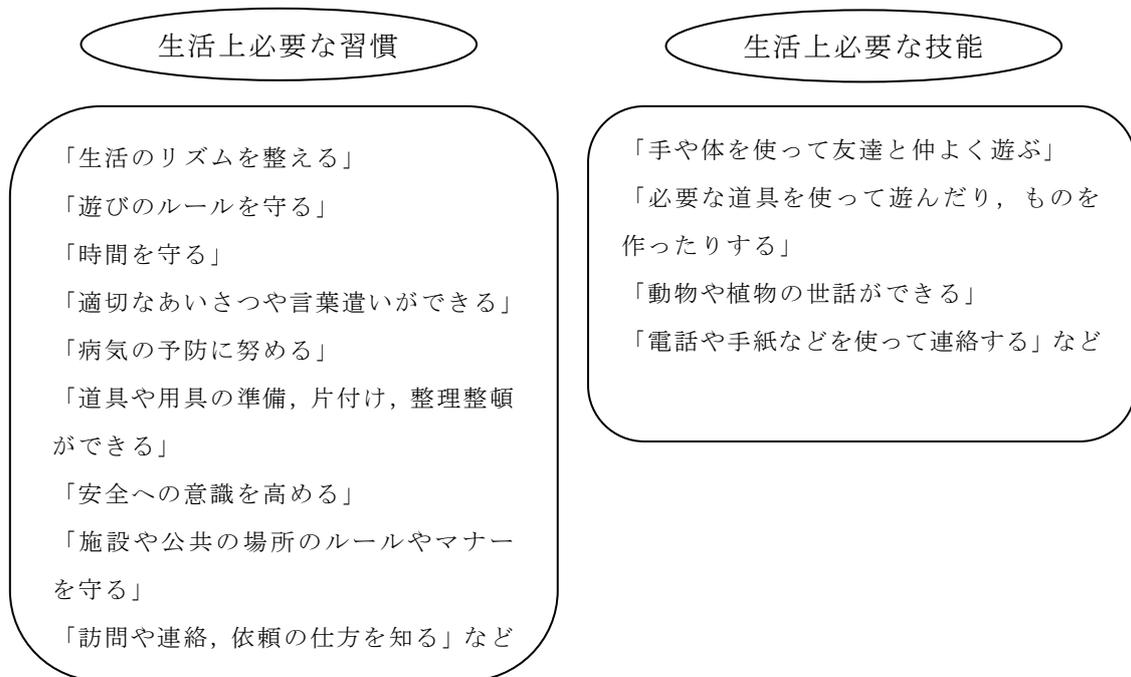


図1 生活上必要な習慣と生活上必要な技能

## オ 自立への基礎を養うこと

自立への基礎を養うことは，生活科の究極的な目標である。ここでいう自立とは，三つの自立を意味している。生活科では「具体的な活動や体験を通して，自立への基礎を養う」ことが究極的な目標である。

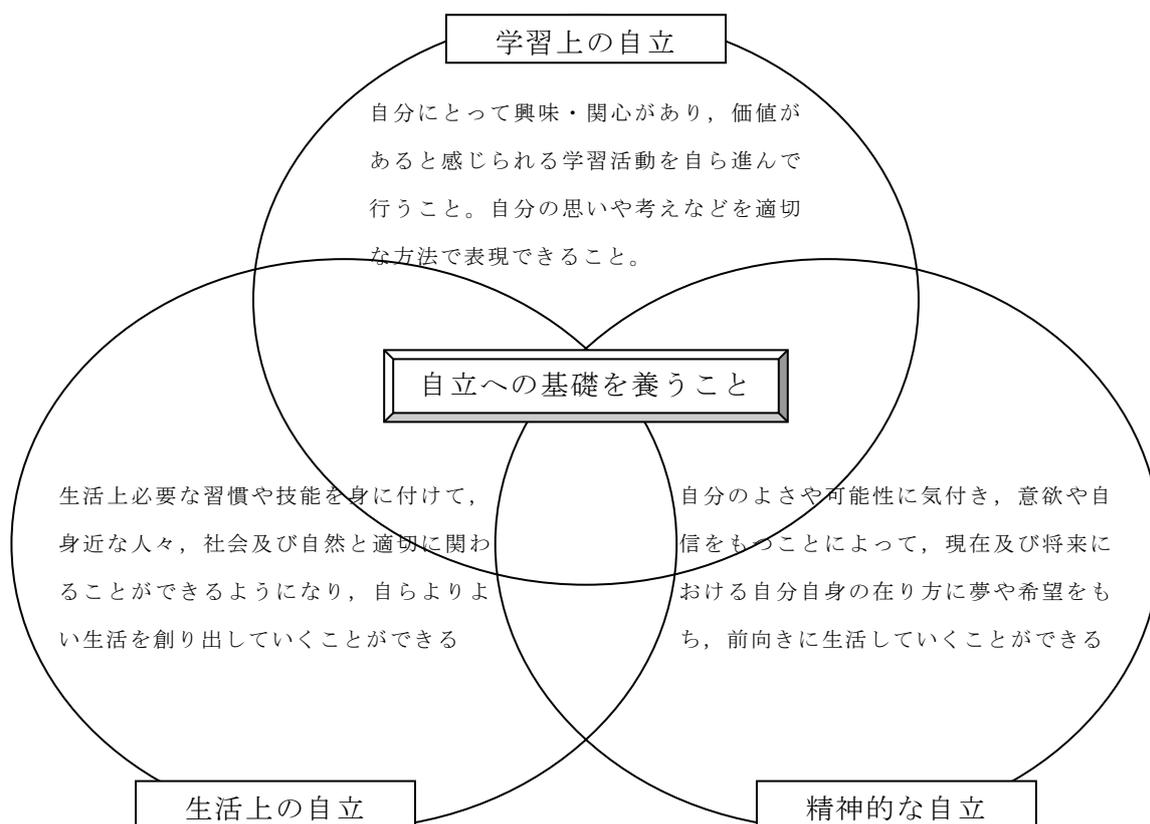


図2 自立への基礎を養うことに関する関係図

### ③ 生活科の内容構成の具体的な視点

生活科の学習内容を構成する際の基本的な視点は，以下の三点である。

- (1) 自分と人や社会との関わり
- (2) 自分と自然との関わり
- (3) 自分自身

この基本的な視点について，小学校学習指導要領解説（解説）では，「具体的な活動や体験を通して学ぶとともに，自分と対象との関わりを重視する生活科の内容の基本構造を原理的に説明したものであり，生活科の基本的な性格を反映したものである。」と説明している。三つの基本的な視点をさらに詳しく示したものが具体的な視点（「小学校学習指導要領解説 生活編」pp. 19-20 参照）である。具体的な視点は，次のような考え方で改訂されている。ここでは，社会科と関連するものを抜粋する。

- 地域で働く人など地域で生活する様々な人や場所などに慣れ親しみ，それらに心がひかれ，離れがたく感じる気持ちを大切にすることができるようにする必要があるので，地域への愛着について加える。
- 生産と消費については，持続可能な社会が求められる中，自らが必要な物をつくとともに，それを繰り返し使ったり活用したりすることができる必要がある。
- 情報と交流については，情報化社会が一層進展する中，多様な情報手段によって伝え合うことが求められるとともに，他者との関わりや交流などのコミュニケーションを深めることができるように必要がある。

#### ④ 「生活科」の内容を構成する具体的な学習活動や学習対象

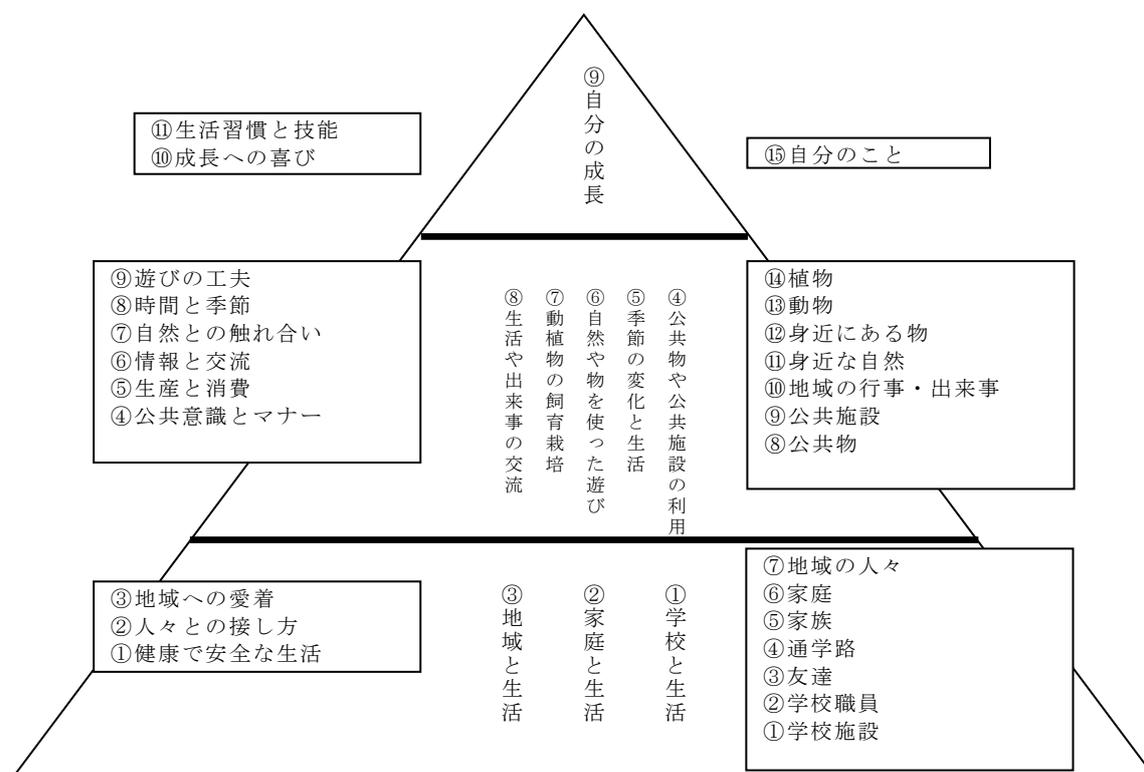
低学年児童に関わってほしい学習対象は次の通りである。

- ①学校の施設 ②学校で働く人 ③友達 ④通学路 ⑤家族 ⑥家庭 ⑦地域  
で生活したり働いたりしている人 ⑧公共物 ⑨公共施設 ⑩地域の行事・出来事  
⑪身近な自然 ⑫身近にある物 ⑬動物 ⑭植物 ⑮自分のこと

小学校学習指導要領解説（生活編）の中では、「生活科は、具体的な活動や体験を内容の一環としているところに特色がある。具体的な活動や体験は、単なる手段や方法ではなく、目標であり、内容でもある。つまり、生活科ではぐくみたい児童の姿を、どのような対象と関わりながら、どのような活動を行うことによって育てていくかが重要であり、そのこと自体が内容となって構成されている。」

#### ⑤ 生活科の内容の階層性

生活科の内容には、下図のような階層性がある。



片上宗二・木村博一・永田忠道『混迷の時代！“社会科”はどこへ向かえばよいのかー激動の歴史から未来を模索するー』明治図書，2011より

図3 生活科の内容の階層性

この階層性について、小学校学習指導要領解説（生活編）では次のように説明している。

「まず、第1の階層として、内容（1）『学校と生活』、内容（2）『家庭と生活』、内容（3）『地域と生活』があり、これらは児童の生活圏としての環境に関する内容である。生活科は、児童の身の回りの環境や地域を学習の対象とし、フィールドとしてい

る。児童にとって最も身近な学校、家庭、地域を扱う内容が第1の階層といえる。

次に、第2の階層として、内容(4)『公共物や公共施設の利用』、内容(5)『季節の変化と生活』、内容(6)『自然を使った遊び』、内容(7)『動植物の飼育・栽培』、内容(8)『生活の出来事の交流』が位置付けられる。これらは、自らの生活を豊かにしていくために低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容である。低学年の時期に体験させておきたい活動とは、低学年の児童の身の回りにあるだけでなく、低学年の児童が関心を向けやすい活動であり、活動を通して次第に児童一人一人の認識を広げ、期待する資質や能力及び態度を育成していくために必要となる活動である。

そして、第3の階層に、自分自身の生活や成長に関する内容(9)「自分の成長」を位置付け、内容(1)～(8)のすべての内容と関連が生まれる階層としてとらえていく。」

## ⑥ 生活科の改善

このたびの学習指導要領の改訂では、生活科において、第3学年以降の社会科、理科との接続・発展も視野に入れて、生活科の各内容の見直しが行われている。具体的には次の二つの内容である。

### ア 内容(3) 「地域と生活」

自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみ愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活ができるようにする。

ここでは、「地域で働いている人」を対象とすることが明示され、「地域には様々な仕事があり、それらの仕事に携わっている人たちがいることに気付くようにする」学習の一層の充実が図られている。

### イ 内容(4) 「公共物や公共施設の利用」

公共物や公共施設を利用し、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かり、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用することができるようにする。

ここでは、「公共物や公共施設を利用すること」が明示され、公共物や公共施設を実際に利用する体験を通して、「身の回りにはみんなで使うものがあることや、それを支えている人々がいることなどが分かるようにする」学習の一層の充実が図られている。

## (2) 社会科と生活科の関連

生活科では、身近な地域や対象に繰り返し関わり、地域社会や地域の人々と自分とのを深める学習活動が行われる。地域での具体的な活動や体験を通じた気付きが、社会科の問題解決的な学習の基礎となる。

社会科と生活科の関連について、「小学校新学習指導要領の展開 生活科編」では、次のように述べられている。

「例えば、地域の公園を探検する活動を生活科の学習で行った場合、観察や調査・見学などの体験とそれに基づく表現活動によって、自分の伝えたいこと・聞きたいことなどを

適切に話す力や活動を通して気付いたり感じたりしたことをシートに詳しく書いたり，メモを用いて情報を整理したりする力が身に付く。対象にじっくりとかかわる時間を保障し，活動に没頭することによって，『もっと知りたい』『調べてみたい』といった探求的な営みが，科学的な見方・考え方の素地を育てていくのである。」

「人・社会・自然を一体的にとらえる低学年では，生活科を中核として他教科などとの関連を図り，横断的・合科的な指導が行われる。そこでの学びが，社会科へと発展する。」

「生活科での『見る』『聞く』『調べる』『つくる』『探す』『育てる』『遊ぶ』などの直接体験を中心とした多様な学習活動を通して，児童の学習意欲や探究心が向上する。また，多様な人との関わりを通し，児童は，自分の見方・考え方を広げ，社会の仕組みに気付いていけるようになる。」

「生活科の学習で，自然への関心を高めたり，動植物を大切に育てたり，友達や地域の人と積極的にかかわろうとしたり，見通しをもって行動したり考えたりする力を児童は獲得する。自然や社会の事象を多面的にとらえ，関係付ける学びを繰り返すことにより，社会科に直接結び付く力が育つと言える。身近なことから問題を見付けたり，願いや思いを大切にしたりしながら問題解決を進める力は，社会科を学ぶ上で欠くことのできない力である。」

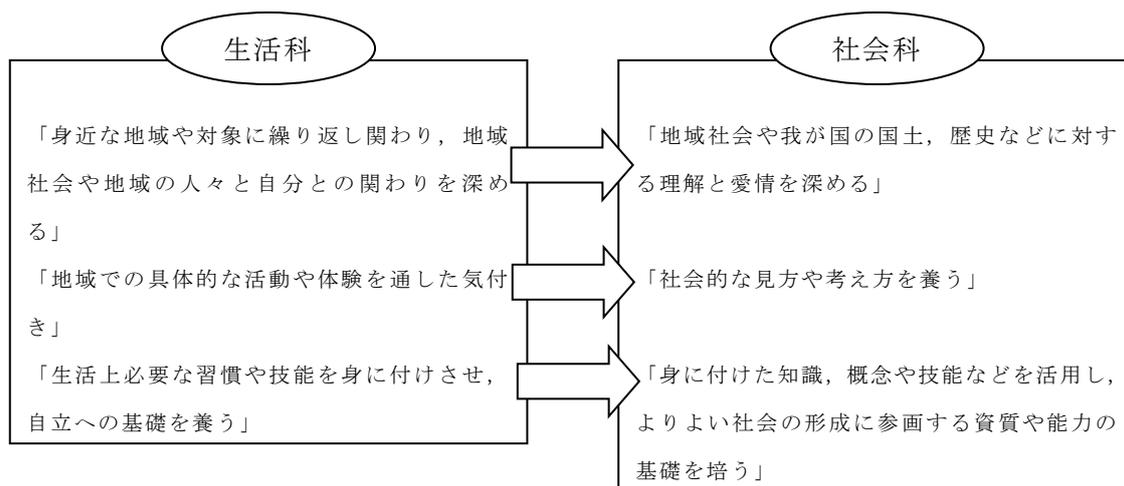


図4 社会科と生活科の関連

<引用・参考文献>

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』，日本文教出版，2008年
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』，東洋館出版社，2008年
- 木村吉彦『小学校新学習指導要領の展開 生活科編』，明治図書出版，2008年
- 北俊夫・片上宗二『小学校新学習指導要領の展開 生活科編』，明治図書出版，2008年
- 片上宗二・木村博一・永田忠道『混迷の時代！“社会科”はどこへ向かえばよいのかー激動の歴史から未来を模索するー』，明治図書，2011年

## 付記2 「総合的な学習の時間」との関連

### (1) 「総合的な学習の時間」の目標

総合的な学習の時間の目標は、以下のようにになっている。

#### 第1 目標

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

総合的な学習の時間の目標は、以下の五つの要素から構成されている。

ア 横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すこと

イ 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること

ウ 学び方やものの考え方を身に付けること

エ 問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること

オ 自己の生き方を考えることができるようにすること

この五つの要素のうち、アは総合的な学習の時間に特有な学習の在り方を示している。すなわち、総合的な学習の時間においては、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すことが目標であり、これを前提にしてイ、ウ、エに示された資質や能力及び態度を育成していくことを求めている。総合的な学習の時間では、これらの資質や能力及び態度を育成しつつ、オに示された自己の生き方を考えることができるようにすることを目指している。

今回の改定においては、総合的な学習の時間を「横断的・総合的な学習」に加えて「探究的な学習」とすること、この時間において「協同的」な態度を育てることが明確にされた。

### (2) 「社会科」と「総合的な学習の時間」を関わらせた単元構成

総合的な学習の時間の年間指導計画を作成する際には、各教科等との関連的な指導を行うことが求められている。もちろん、「社会科」と「総合的な学習の時間」を関わらせて単元を構成することも可能である。

その際、総合的な学習の時間を、社会科で身に付けた知識・技能等の「実践の場」、すなわち「出口」としてとらえて関わらせることを意識したい。

二つの事例を紹介する。

「社会科」から「総合的な学習の時間」へ

例としては、中学年の単元である「わたしたちのくらしとごみ」が挙げられる。

この単元の学習を通して、「自分たちのまちにもごみの問題はあるのか」という課題をもたせる。この課題意識を基に、「自分たちのまちのごみを調べてみよう」という「総合的な学習の時間」を展開していく。

この活動の中で、自分たちのまちのごみの種類をグラフや表にまとめたり、新聞などの表現物を通して他者に伝えたりすることも可能である。

また、「ごみを減らすためにはどうすればよいだろう」といった新たな課題を発見し、課題解決を行うこともできる。

社会科だけではできなかった発展的な内容を、総合的な学習の時間を活用することで、学習することが可能となる。

「社会科」から「総合的な学習の時間」、そして「社会科」へ

例としては、中学年の単元である「わたしたちのすむまちや広島市の様子」「安全なくらし」が挙げられる。

「わたしたちのすむまちや広島市の様子」を学習した後に、「私たちのまちは、住みよいまち・すてきなまちか調べてみよう」という「安全」を視点とした「総合的な学習の時間」を展開していく。ここでは、地域の人にインタビューを行ったり、警察の方の話を聞いたりする。

その後、社会科で「安全なくらし」を学習することにより、私たちの地域の中にも、「安全」を守る工夫がされていることにも目が向き、より多面的に社会科の学習を進めていくことができる。

### (3) 「社会科」と「総合的な学習の時間」を関わらせながら学習する時の留意点

社会科には社会科のねらいがあり、総合的な学習の時間には、総合的な学習の時間のねらいがある。両者に関わらせながら学習するときには、それぞれのねらいを十分理解した上で、区別して学習を進めていくべきである。

「社会科」と「総合的な学習の時間」の違いを意識せず安易な関わり方をすると、それぞれのねらいを達成することができなくなってしまうので注意が必要である。

#### <引用・参考文献>

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』，東洋館出版社，2008年
- 岩田一彦『社会科固有の授業理論 30の提言—総合的な学習との関係を明確にする視点—』，明治図書，2001年
- 片上宗二・木村博一・永田忠道編『混迷の時代！社会科はどこへ向かえばよいのか』，明治図書，2011年

## 付記3 「言語・数理運用科」との関連

### (1) 「言語・数理運用科」とは

#### ① 「言語・数理運用科」創設の背景

広島市では、平成14年度から県下一斉に実施されている「『基礎・基本』定着状況調査」の分析結果から、読み・書き・計算などの基礎的な知識や技能については着実な向上が見られるものの、思考力・判断力・表現力については、より一層の向上を図る必要があることが明らかとなった。「基礎的な知識・技能の確実な習得」とともに、「思考力・判断力・表現力の向上」を図るため、国語科、算数科、数学科といった教科の枠を越えた「言語運用能力」と「数理運用能力」の確実な定着を図ることが、広島市の子どもたちの当面の課題とされた。こうした課題を受けて、言語や数理を運用する力を育み、思考力・判断力・表現力を向上させ、さらに日常生活の中で活用できるようにすることを目的として、広島市独自の新教科「言語・数理運用科」が創設された。

#### ② 「言語・数理運用科」の目標

「言語・数理運用科」の目標は以下のとおりである。

日常生活に見られる様々な事象について、テキストから目的に応じて必要な情報を取り出し、各教科等で身に付けた知識や経験と関係付けて思考・判断し、自らの考えを適切に表現する力を育成する。

「言語・数理運用科」では、何らかの知識を得ることを目的とするのではなく、「情報を取り出す力」、「思考・判断する力」、「表現する力」を育むことをねらいとしている。

また、ICTの発達が加速する現代社会においては、情報活用能力の育成が不可欠であり、「言語・数理運用科」では、文字や数値をはじめとする様々な情報に触れながら考えたり、表現したりする活動を行うことにより、情報を活用する力の向上を図ることも目指している。

#### ③ 「言語・数理運用科」の位置付け

新学習指導要領では、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、「基礎的な知識・技能」を確実に習得させ、「思考力・判断力・表現力」を育み、「主体的な学習に取り組む態度」を養うことを重視することが示された。

しかし、教科の指導は知識・技能の習得が中心となっており、それらを活用する学習や、探究的な活動を行う「総合的な学習の時間」への接続が十分でないという面が示された。そこで、習得と活用、探究をつなげる架橋的な役割を担う教科として、「言語・数理運用科」は位置付けられた。まず、各教科において知識・技能を確実に習得させ、次に「言語・数理運用科」においてこれらの知識・技能を活用して課題を解決する手だてを身に付けさせ、さらに「総合的な学習の時間」において探究的な活動を行い、学校教育全体で「思考力・判断力・表現力」の向上をめざすということである。

### (2) 「言語・数理運用科」の内容と学習過程

#### ① 内容

「言語・数理運用科」では、身の回りの事象や社会事象・自然事象を題材にした連続型テキストや非連続型テキストによる資料を基に、問題解決的な学習を行う。

小学校第5学年から中学校第3学年までの5年間の学習指導計画をはじめ学習目標及び内

容、取り上げる題材、資料及び教材等を系統的に整理し、各学校はそれに基づいて実施している。その概要は次の通りである。

A：言語運用能力に関する内容

- ・ 連続型テキスト（新聞，説明書，ホームページなど）を目的に応じて読んだり，聞いたりして，自らの考えをまとめ，内容について吟味する。
- ・ 連続型テキストに基づいて，自らの考えを，目的や意図に応じた的確に話したり，筋道を立てて書き表したりする。

B：数理運用能力に関する内容

- ・ 非連続テキスト（数式・図表・グラフなど）から情報を取り出し，処理し自らの経験などに関連付けて，筋道を立てて考える。
- ・ 自らの考えを整理し，非連続テキストを用いて表す。

また，年間指導計画等の作成にあたっては，

A：主として言語運用能力に関わる内容

B：主として数理運用能力に関わる内容

C：言語運用能力・数理運用能力を総合的に活用する内容

の3領域をバランスよく配列し，目標を達成できるように構成している。

さらに，広島独自の教材として「広島の路面電車」，「ザ・広島ブランド」，「お好み焼き」など，広島特有の題材を多く入れてテキスト集を編成している。

## ② 学習過程

問題解決的な学習を基本とする「言語・数理運用科」の学習過程は，右図のとおりである。

1単元を，「情報の取り出し」，「思考・判断」，「表現」の学習過程で構成し，それぞれの過程での学習活動が言語活動となっている。テキストから目的に応じて情報を取り出し，各教科で身に付けた知識・技能と関連付けて思考・判断し，最終的には言語による表現や数式，グラフなどの数学的な表現で自分の考えを適切に表現するという学習過程である。

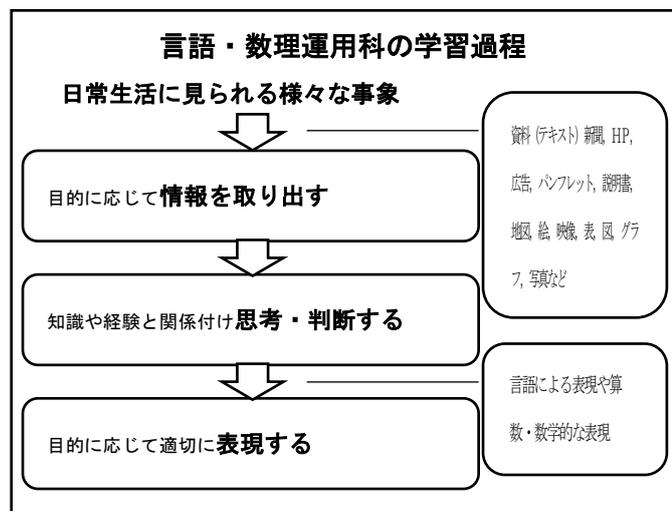


図1 言語数理運用科の学習過程

## (3) 社会科と「言語・数理運用科」との関わり

社会科と「言語・数理運用科」の関わりについて，広島市教育委員会編「言語活動実践ガイド」には明示されていないが，共通点と相違点について，以下に整理してみたい。

### ① 共通点

一つ目は，思考方法である。「言語・数理運用科」では，六つの思考方法が示されている。  
 ア比較して考えること イ分類・整理して考えること ウ要因となる事柄に関係付けて考え

ること エ多面的・分析的・総合的に考えること 才類推的・帰納的・演繹的に考えること  
カ評価して考えること の六つである。

これらは、「言語・数理運用科」に固有の思考方法ではない。社会科においても、「比較・  
関連・総合」等の思考は必要とされる。

二つ目は、内容面である。「言語・数理運用科」では、「広島路面電車」，「ザ・広島  
ブランド」，「お好み焼き」，「もみじまんじゅう」等，広島らしさを取り入れた教材を多  
く扱っている。社会科でも，中学年において「お好みソース工場」，「かき」，「熊野筆」，  
「地域の発展に尽くした先人」等，地域と関わりの深い教材を取り入れている点で共通して  
いる。

## ② 相違点

一つ目は、教科の目標の違いである。

社会科の教育目標は、「社会認識を通して市民的（公民的）資質を育成する」ことである。  
社会科は、地理学・歴史学・政治学・経済学・社会学などの社会諸科学から抽出された概念  
や法則性を教えることが中核である。また、概念や法則性といった科学知の形成のみを意図  
するのではなく、子どもが教養知・定型知を習得し、人間の働きについての理解を進めてい  
くことも目的としている。様々な価値判断場面や人々の行動を、一人一人が独自の解釈をし、  
個性的な判断、未来予測をしていくことも重要視される。それに対して「言語・数理運用科」  
では、何らかの知識を得ることをねらいとするのではなく、あくまで「情報を取り出す力」，  
「思考・判断する力」，「表現する力」を育むことをねらいとしている。

二つ目は、学習過程の違いである。

社会科では社会諸科学から抽出された概念や法則性を教えるわけであるが、この概念や法  
則性は、子どもにそれを示して教えれば身に付くわけではない。子どもが問題を発見し、仮  
説を立て、自ら検証していく過程を経て、初めて学習として成立する。広島市小学校教育研  
究会社会科部会が示す、「『であう』—『ふかめる』—『いかす』」というような学習過程  
を通じて、概念や法則性を身に付けていくのである。一方、「言語・数理運用科」では、「『情  
報の取り出し』—『思考・判断』—『表現』」の学習過程がとられるが、子どもが問題を発  
見したり、仮説を立てて検証したりすることはない。テキストから情報を取り出し、各教科  
で身に付けた知識や経験と関係付けて、思考・判断・表現することが重視される。

### <引用・参考文献>

○広島市教育委員会『言語活動実践ガイド—思考力・判断力・表現力を高める「ひろしま型カリ  
キュラム」』，ぎょうせい，2011年

○岩田一彦・米田豊『言語力をつける社会科授業モデル 小学校編』，明治図書，2008年

## 付記4 「平和教育」との関連

### (1) 広島と平和教育

被爆後70年が経過し、当時の様子を知る多くの方々は高齢化し、戦争体験の伝承そのものが難しくなっている。このような中で、私たちは次世代に、あるいは世界に、ヒロシマをどのように伝えていけばよいのだろうか。

広島における平和教育は、1960年代末、原爆体験の風化を憂慮した被爆教師の手によってはじめられ、広島の子どもたちだけではなく、日本に、世界に原爆の恐ろしさ、生命の尊さ、一人一人の人間の尊厳、平和の大切さなどを発信し続けてきた。このような学びを、未来へとつないでいくために、広島は平和教育を重視し、様々な取組を行ってきている。

### (2) 社会科と平和教育

現行の学習指導要領では、社会科の目標を小・中学校ともに「・・・国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」としている。つまり、平和について考え、行動できる市民を育成することが社会科の使命であると言える。

これを受け、広島の世界科では、子どもたちがヒロシマを受け継ぎ、地球的視野で考え、社会へ参加・参画しようとする力をつけるために研究実践を重ねてきている。

国際平和文化都市広島で社会科を学んだ子どもたちは、人間として普遍的に大切な資質や能力である「国際平和文化創造力」(p.1参照)を身に付け、未来に向かって平和の担い手となっていくであろう。

以下は、平成23年の平和記念式典における子ども代表による「平和への誓い」である。

#### 平和への誓い

今年、3月11日、東日本では、大震災によって、たくさんの方が命を失いました。今でも行方がわからない人がたくさんいます。

多くの方が大切な家族や友だちを失い、津波で何もかもなくなった被災地の姿に、わたしたちは言葉を失い、悲しく、胸が苦しくなりました。

66年前の今日、午前8時15分、広島に原子爆弾が投下されました。

爆風が何もかも吹き飛ばし、炎がすべてを焼き尽くし、人々の当たり前の生活と、多くの尊い命が一瞬にして奪われました。

どんなに苦しかったでしょう。

どんなにつらかったでしょう。

どんなにくやしかったでしょう。

わたしたち一人一人は、だれもがみな大切な存在です。

それなのに、どうして人間は、たくさんの方の命を犠牲にして戦争をするのでしょうか。

戦争を始めるのは人間です人間の力で起こさないようにできるはずです。

悲しみに満ちた広島に草木が芽生えました。

人々は、平和への強い思いをもって、復興に向けて歩みはじめました。

未来をつくるのは人間です。

喜びや悲しみを分かち合い、あきらめないで進めば、必ず夢や希望が生まれます。

わたしたちは、人間の力を信じています。

人間は、相手を思いやり、支え合うことができます。

人間は、互いに理解し合い、平和の大切さを伝え合うことができます。

わたしたちは、今を生きる人間として、夢と希望があふれる未来をつくるために、行動していくことを誓います。

平成 23 年(2011 年)8 月 6 日

※ 毎年広島市の小学校 6 年生を対象に「平和」についての作文を募集・選考し、入賞した 20 人により意見発表会・学習会を開催。世界に訴えたいことなどを発表するとともに話し合い、代表者二人が平和記念式典で「平和への誓い」として世界へ発信する。

この「平和への誓い」にみられるヒロシマの子どもたちのメッセージは、自分なりの考えをもち、それを表現しながら社会への参加・参画を考えようとする姿である。それは、未来に希望をもつ子どもたちの姿であり、広島の社会科がめざす子ども像である。

### (3) 平和教育プログラムについて

広島市教育委員会は、平和教育を一層充実させるために、これまでの各学校における取組を体系化し、小学校から高等学校までの 12 年間を見通した平和教育プログラムを策定した。

本プログラムでは、児童生徒が、被爆の実相などの事実を捉え、その事実を通して未来を志向し、平和で持続可能な社会の形成者として必要な以下のような知識や能力などを身に付ける内容とする。

- ・ 被爆の実相や戦争等に関する知識
- ・ 課題を解決するための思考力・判断力・表現力
- ・ 自他を敬愛し、他者とよりよく関わる技能
- ・ 人や自然を尊重し、世界平和を愛する心情

また、本プログラムでは、焦点化した効果的な学習ができるよう、各学年、3～5 時間程度の学習ユニット(小単元)を設定し(図 1 参照)、「ひろしま平和ノート」に沿って取組を行う。

その主な内容は以下の通りである。

○ プログラム 1：小学校第 1 学年～第 3 学年

【被爆の実相に触れ、生命の尊さや人間愛に気付く】



ひろしま平和ノート  
(小学校用)

国語科や特別活動、道徳の時間において、児童が絵本やテキストなどの教材を通して、被爆した当時の様子や人々の気持ち等に触れ自分や家族、友だち、動植物など生命あるすべてをかけがえのないものとして尊重し大切にすることを育てることのできる指導の内容とする。

○ プログラム2：小学校第4学年～第6学年

【被爆の実相や復興の過程を理解する】

国語科や社会科、特別活動、道徳の時間において、児童が被爆体験を聴いたり、テキストなどを活用し、国際平和文化都市をめざし復興を遂げてきた広島市の様子について調べたりするなどの学習を通して、被爆の実相について理解するとともに、郷土の発展に努めてきた人々に対する尊敬や感謝の念を深めることのできる指導の内容とする。

○ プログラム3：中学校

【世界平和にかかわる問題について考察する】

国語科や社会科、特別活動、道徳の時間において、生徒が被爆の実相をはじめ、国際社会の諸問題について、平和で持続可能な社会を形成するという観点から、教科書やテキストなどを活用して、よりよい社会を築いていくために解決すべき課題を探究し、自分の考えをまとめるなどの学習を通して、世界平和にかかわる問題について考察することができる指導の内容とする。

○ プログラム4：高等学校

【平和で持続可能な社会の実現について展望する】

国語科や地理歴史科、公民科、外国語科、特別活動、総合的な学習の時間などにおいて、生徒が社会背景や世界情勢等を踏まえ、被爆の実相をはじめ、国際社会の諸課題について、教科書やテキストなどを活用しながら、多面的・多角的に探究し、望ましい解決の在り方についての考察を深めるなどの学習を通して、平和の尊さや人間の尊厳についての認識を深め、平和で持続可能な社会の実現について展望することができる指導の内容とする。

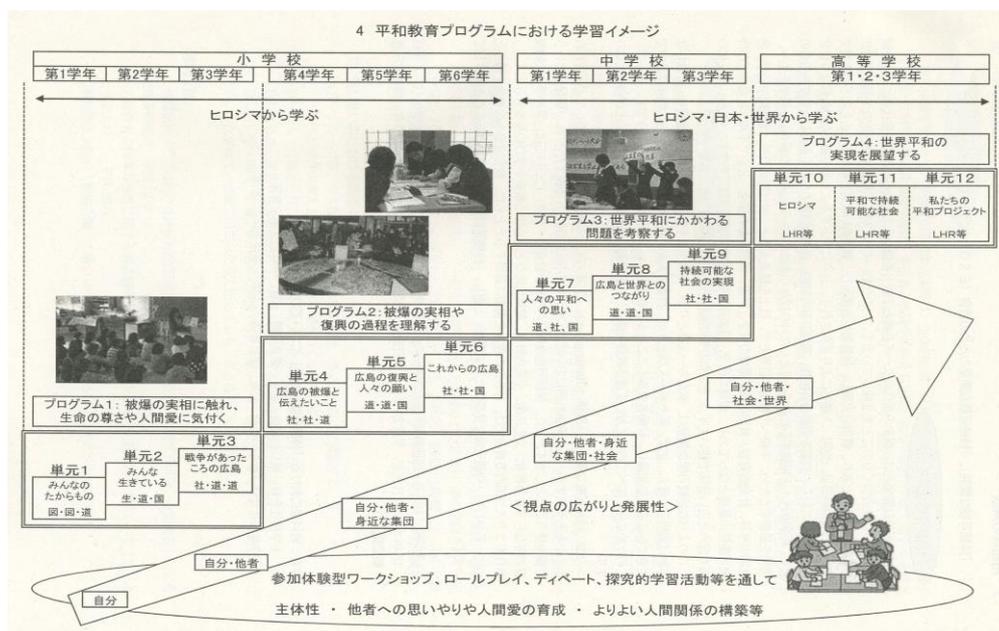


図1 平和教育プログラムにおける学習イメージ

表1に、「ひろしま平和ノート」の内容を紹介する。

表1 「ひろしま平和ノート」各学年の内容

テーマ 学習の流れ	学年	学習内容 *教科は例である
小学校1・2・3年  「いのち・しぜん・きずな」  気付く→考える→伝える	1年生	みんなのたからもの 学習1: ぼく・わたしのたからもの ~たからものをえにかこう~ (図画工作科) 学習2: ぼく・わたしのたからもの ~たからものをしょうかいしよう~ (図画工作科) 学習3: 金魚がきえた (道徳)
	2年生	みんな生きている 学習1: もっと草花となかよくなる (生活科) 学習2: アオギリ (道徳) 学習3: アオギリさんたちへの手紙 (国語科)
	3年生	せんそうがあつたころの広島 学習1: 子どもたちのくらし ~今と昔~ (社会科) 学習2: 家族のきずな (道徳) 学習3: 引きさかれる家族 (道徳)
小学校4・5・6年  「郷土ひろしま 被爆と復興」  気付く→考える→発信する	4年生	広島のひばくと伝えたいこと 学習1: フラワーフェスティバルにこめた願い (社会科) 学習2: 広島のひばくと人びとのくらし (社会科) 学習3: 残したいもの・伝えたいこと (道徳)
	5年生	広島市の復興と人々の願い 学習1: 戦争・原子ばくだんがうばつたもの ~ひばく者の思い~ (道徳) 学習2: 復興と人びとの願い (道徳) 学習3: 復興・発てんのにない手として (国語科)
	6年生	これからの広島 学習1: 平和なまちづくり (社会科) 学習2: くらしの中の平和 (社会科) 学習3: より平和なまちづくりをめざして (国語科)
中学校  「受け継ぐ 平和への思い」  知る→思考する→発信する	1年生	人々の平和への思い 学習1: お好み焼きに込められた思い (道徳) 学習2: 平和記念都市建設に込められた思い (社会科) 学習3: 自分たちの学校や地域社会の平和 (国語科)
	2年生	広島と世界とのつながり 学習1: 世界に広がっていったサダコと折り鶴 (道徳) 学習2: 国境を越えた「愛」と「勇気」 (道徳) 学習3: 平和のためのレシピ (国語)
	3年生	持続可能な社会の実現 学習1: 核兵器をめぐる世界の現状 (社会科) 学習2: 国際平和に向けての取り組み (社会科) 学習3: 平和で持続可能な社会に向けて (国語科)
高等学校  「ヒロシマ発 持続可能な社会の実現」  情報整理→思考・探求→発信	1年生	ヒロシマ 学習1: 平和とは何か (LHR等) 学習2: 原子爆弾と被爆の実相 (LHR等) 学習3: 被爆体験者が伝えること ~中沢啓治さんからのメッセージ~ (LHR等)
	2年生	平和で持続可能な社会について 学習1: 核兵器について考える (LHR等) 学習2: ヒロシマに対する人々の思い (LHR等) 学習3: ヒロシマから国際社会へ (LHR等)
	3年生	私たちの平和プロジェクト 学習1: 平和の実現のために自分ができること (LHR等) 学習2: 私の平和プロジェクト (LHR等) 学習3: 私のめざす進路と「平和」 (LHR等)

<参考・引用文献>

- 広島市教育委員会『広島市立学校平和教育プログラム指導資料』, 2013年
- 広島市教育委員会『平和教育の指導資料—平和教育の指導計画試案—』, 2006年
- 県立広島大学, 地球市民共育塾ひろしま『参加型で学ぶ「広島」「ヒロシマ」「Hiroshima」』, 県立広島大学, 2012年
- 広島市教育委員会『ひろしまへいわノート (小学校1・2・3年)』, 2013年
- 広島市教育委員会『ひろしま平和ノート (小学校4・5・6年)』, 2013年
- 広島市教育委員会『ひろしま平和ノート (中学校)』, 2013年
- 広島市教育委員会『ひろしま平和ノート (高等学校)』, 2013年

## あ と が き

広島社会科は、創設以来一貫して、「学ぶことが楽しい」「意欲的に学ぶ」「活動や体験を楽しむ」「ふりかえり、工夫する」「かかわりを大切にする」というような子どもたちの姿を目指してきました。そして、「学ぶ喜びがあり、考え、地域の事象や人物の姿から学ぶ社会科」の実践研究を積み重ね、その成果を全国に発信し続けてきました。

また、これまで変わらず大切にしてきたことは「国際平和文化都市広島」に生まれ育った子どもたちが大人になる十年後、二十年後の社会を輝いて生きていくための力、「国際平和文化創造力」の育成を目指してきたことです。こうした背景を基盤として継続的に研究実践を積み重ねてきたことを、今回、第4回目の全国大会で広島から全国に発信させていただきます。

研究主題をこれまでの広島社会科のあゆみ、現在の社会情勢、これからの社会を生きていく上で求められるもの、子どもたちの実態、旧研究主題のもとでの社会科実践上の課題等を総合的に鑑みながら「社会を見つめ、未来を問いつける社会科教育の創造—学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力の育成—」と設定しました。

変化の激しい社会に対応していく子どもたちを育てるためには、今一度、不易である基本に立ち返り、社会認識の形成を通して、公民的資質の育成を図る教科である社会科の本質にせまる研究に取り組むべきであると考えました。社会科を専門教科とする教師にとっても、「教科書を読み取るのが社会科だ」としている教師にとっても、「これぞ社会科」と納得いく授業を創造していきたい。今回の研究主題の設定は、これまで諸先輩方が築き上げてきた「広島社会科」を継承しつつ、社会認識を形成するとは、公民的資質を育成するとはどういうことなのか、そして、どうすればよいのかを探る実践研究を進めるために提起するものです。

この研究主題の実現を目指し、これからの社会科授業実践の指針になればと思い、新たに「社会科研究のてびき」を作成しました。地域密着型の地域教材、今日的な課題を解決していこうとする人々の問題解決の姿を教材化していきます。そして、学習過程を「であう」「ふかめる」「いかす」の三段階とし、社会的認識をしっかりと育て、より実践的な力を育てていきます。

本てびきの作成にあたっては、平成22年度より、定期的に研究部会を持ち、研究主題の再検討から始め、協議を重ねてきました。社会科初心者に分かりやすく、ベテランには奥の深い「社会科研究のてびき」になればと思い作成しました。広島社会科部会員の叡智が込められた「社会科研究のてびき」です。これからの社会科の授業づくりにきっと役立つものと確信しています。大いに活用していただき、忌憚のない御意見を賜り、今後の研究に生かしていきたいと考えています。

平成27年3月

広島市小学校教育研究会社会科部会研究部

名 称	社会科研究のてびき
事 務 局	広島市立宇品小学校 広島市南区宇品御幸四丁目5番11号
発 行 年 日	平成27年3月
発 行 者	広島市小学校教育研究会社会科部会